

〈資料〉

## 2015年度「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト報告

石本雄真・小谷健一

### はじめに

昨年に引き続き、教員養成センターでは、2015年度後期に「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト(2015年度学長経費(教育・研究改善推進費))を企画実施した。プロジェクトは以下のように、〈学び〉、〈遊び〉、〈つなぐ〉の3つで展開した。

〈学び〉 現職教員の方々から、授業づくりやクラスづくりの極意を学ぶこと、教職に就いた後に続く、教員としてのさまざまなキャリア形成のあり方を学ぶことを目標として、「学びの教室」および「学びのパネル」(パネル・ディスカッション)を実施した。さらに今年から、若手の先生と、教職への不安や希望について、現在の学校について、ざっくばらんに語り合う「学びの座談会」を行った。

#### 「学びの教室」(全6回)

第1回 10月19日(月)

講師：山口尚子 鳥取市立世紀小学校教諭〈学級経営，図書館〉

第2回 10月27日(火)

講師：奥田仁美 鳥取市立湖東中学校教諭〈小・中兼務教員〉

第3回 11月10日(火)

講師：横山由佳 鳥取市立大正小学校教諭〈上海日本人学校派遣2012～2014〉

第4回 12月11日(金)

講師：長谷川理恵 鳥取市立湖南学園教諭〈小中一貫，英語教育〉

第5回 1月12日(火)

講師：中村満 八頭町立八頭中学校教諭〈生徒指導，英語〉

第6回 1月18日(月)

講師：田中晁宏 鳥取県立鳥取中央育英高等学校教諭〈地域と学校〉

#### 「学びのパネル」(全2回)

第1回 12月3日(木) テーマ「特別支援教育」

(コーディネーター：教員養成センター教員 小谷健一，石本雄真)

パネリスト：大川祐子 鳥取市立修立小学校教諭(LD等専門員)

細砂知子 鳥取市立美保南小学校教諭(通級指導教室担当)

梶浦紀子 鳥取市立醇風小学校教諭(学級担任)

第2回 12月4日(金) テーマ「不登校への対応」

(コーディネーター：教員養成センター教員 小谷健一，石本雄真)

パネリスト：八木浩子 鳥取県いじめ・不登校総合対策センター指導係長

村口理英 鳥取市立南中学校教諭

清水ゆかり 鳥取市立湖山小学校養護教諭

#### 「学びの座談会」(全1回)

第1回 1月14日(木)

山本将博 鳥取市立美保小学校教諭

山根幸洋 鳥取市立末恒小学校教諭

〈遊び〉 遊びを通して学ぶことは大切である一方で、遊びきることも大切である。しかしながら、そのバランスを取るのが難しいところであるというスタンスから、遊びを取り入れた授業を学びながら、最後には参加者で遊びを通じた学びを作ることを目標に実施。クラブ活動(ボードゲームクラブ)の時間に、一緒に小学生と活動も行う。

「遊びの教室」(全3回)

第1回 11月19日(木)

講師：田村多恵子 湖山小学校教諭

第2回 12月17日(木)

講師：田村多恵子 湖山小学校教諭

第3回 1月21日(木)

講師：教養ゼミナール参加学生・大谷直史(教員養成センター)

<つなぐ> 教員のしごと、子どもたちが育っていく社会も、多様化、グローバル化している。学校には、不登校や非行、虐待や発達障害、異なる文化など、生活上のさまざまな課題が持ち込まれる。校内のスタッフとの連携ばかりでなく、地域社会や学外の機関とも協力しなければならない。これからの社会でしごとをする教員として、どのようなつながりを持つのか/つながるのか、本年度はスクールカウンセラーの講義と、高校における地域フィールドワークの実践に参加しながら学びをすすめる。

第1回 11月4日(水)「スクールカウンセラーの仕事～見立てること・つなぐこと～」

講師：小林幹子(臨床心理士・スクールカウンセラー)

鳥取県立日野高校「産業社会と人間」

8月25日(火)、9月1日(火)、9月15日(火)、9月29日(火)

鳥取県立鳥取中央育英高校「地域探究の時間」

9月9日(水)、9月16日(水)

以下では、「学びのパネル」(パネル・ディスカッション)の様子を議事録で紹介する。

## テーマ1 「特別支援教育」

〔※注：講演は写真を含めたパワーポイント資料をプロジェクターで投影しておこなわれており、写真やスライドを指し示しながらの場面が含まれるが、文中には特にその箇所を明示していない。〕

(石本) 第一回の学びのパネルを始めたいと思います。今日のテーマですが、特別支援教育における対応と連携ということで三人の先生方にお話をいただきます。最初に今日のこの学びのパネルのテーマについて説明してから先生方をご紹介いたしますね。

ここに出席されている学生さんたちは多分、教員になるかどうかは別としても教員になることを視野にいれている方だと思います。最近、ADHDだったり、LDだったり、ASDと言われるような自閉症スペクトラム障害だったり、そういった話を聞くことがあるとおもいます。またそういった発達障害ではなくて、他の知的障害などさまざまな対象に特別支援教育は行われています。

みなさん、小学校の免許とか中学校の免許とか高校の免許をとる、特別支援学校の免許をとるわけじゃないと思っている方でも全然関係ないわけではなくって、やっぱり通常学級でそういった特別支援が必要な子とか、そういった配慮が必要な子と出会う可能性はほぼ百パーセントあると思っています。誰でも絶対にあります。

そんな中で1つだけスライド見てもらおうと、そういう特別な支援が必要な児童生徒への対応が難しいという風にどの先生も思っておられるという状況があります。学校の先生にこういうことが悩みですかって聞いた時に、小学校の先生も中

学校の先生も4番目に多くあげられているのが、特別な支援が必要な児童生徒への対応が難しいということです。

そういうことに関して大学では、こういう障害がありますよとかこういう障害に対してこういう療育方法がありますよ、こういう対処法がありますよって話を授業の中とかではしてはいますが、実際ね、みなさんが学校の先生になって担任を持ったりしたときに、そこにそのクラスにそういう特別な支援が必要な子が居た時に、まあ、必要な子がいる、いないという考え方もちょっと正しくないんですけどね、みんなに要ると思った方がいいんですけど、そういう子に対して、どうい対応をしていくのかといったことに関しては、実際に働いている先生方にお話を聞くのが一番いいと思いますので、今日はそういった機会としてみなさんがお話を聞いていただけたらな、という風に思っています。

まず今日の流れですけども、今主旨説明ということでお話をしました。今から、先生方のご紹介をします。その後、順番に先生方におおむね20分ずつお話をいただいて、最後に皆さんとの質疑応答としたいと思いますので、こういった人数がたくさんいるとね、質問というのは出にくくなるんですけど、それでもできる限りこういう機会は少ないと思いますので質問を出していただいたらいいんじゃないかなと思います。じゃあ、先生方の紹介を小谷先生の方からしていただいたら、と思います。

(小谷) はい、じゃあ今日のパネリストの先生方をご紹介します。最初に、一番左に座っておられます大川先生です。大川先生は鳥取市立修立小学校の先生です。そこにLD等専門

員とありますが、LD等専門員ってなんだろうと思いますよね。詳しくは話の中に出てきますかね。石本先生からも紹介のあったLD等ですが、LDだけではなくADHDとか、自閉症とか軽度発達障害のある子どもたちの対応を各学校側からの要請に応じて行います。子どもたちを見て、検査をしったりということもされますし、先生方の相談などにも乗ったりということもされます。ですから、相談の仕事がほとんどです。

それから細砂知子先生。鳥取市立美保南小学校の先生です。通級指導教室担当って、これまたなんだろうと思うかもしれませんがね。各学校に特別支援学級っていうのがあるの知っていますよね。障害にはいろんな種類があるんですけども、特に通級指導教室は発達障害のある子どもたちですよ。

(細砂) はい、発達障害のある子どもたちです

(小谷) はい、発達障害のある子ども達为中心でして、通常学級にいても指導を要する子どもたちがいるので、通級指導教室の方に行っているような指導を受けるということです。

それから、梶浦先生は鳥取市立醇風小学校の先生です。発達障害と認定されなくても、非常にきめ細やかな対応を必要とする子ども達が通常学級にもいます。梶浦先生は通常学級で担任をしながら、じゃあそういう子ども達にどう指導をするのかというような話をさせていただこうと思っています。今日は三人の先生方がそれぞれの立場で話をされると思いますので、実際学校でそういう特別支援を要する子ども達にどう対応していくのか。あるのはひょっとしたらどういことが課題かってことも出てくるかもしれませんので、しっかりと聞いて学んでください。コーディネーターは教員養成センターの石本先生の方が担当します。では、よろしくお願いします。

(石本) よろしくをお願いします。

(1) パネリスト講演：  
大川祐子 鳥取市立修立小学校教諭  
(LD等専門員)

(大川) 失礼します。修立小学校に在籍しています、LD等専門員の大川と申します。三年前から発達障害、と診断された子どもさんや、学習や行動、対人関係で困りがある子どもさんの支援に対する相談活動を行っています。それでは、ちょっと座って失礼したいと思います。

ということで、実は特別支援教育とLD等専門員というのは実はとてもリンクすることが多いので、まず特別支援教育の動向という所から話をし、どんな仕事をしているかということについて続いてお話していきたいと思っています。特別支援教育、いつから始まったか、いつからこの言葉が出てきたか皆さん知っていますか。実は、平成18年、そして19年に施行されています。ということで特別支援学校とか、特別支援学級という名前が耳にされるようになったのは、実はね8年ほど前からのことなんですよ。でも、名前だけではなくて、一番大事な変更というのが実は考え方です。それまでの考え方は特殊学級、特殊教育というもので、特別な場所で学習する教育というような考え方が中心でした。そこから大きく変わったのがここに書いてあるように、特別な教育、スペシャ

ルな教育を一人ずつに個に応じてやっていこうというもので、この特別支援教育の基本的な考え方が大きくなっています。個別の指導計画や個別の教育支援計画っていうものをそれぞれの個に応じて作っていく、ということがとても大事になってきたんですね。こういう所が、実は私たちの今やっているLD等専門員のルーツになってくるわけです。

皆さん、何歳の時に特別支援教育が始まったのでしょうか。多くの方は義務教育とか、高校教育までに特別支援教育って耳にされて、実際に学級ができたりしていたと思うんですけども、じゃあ24才以上の方っていうのは特別支援教育というものを全く、義務教育の間に受けていないんですね。ということで、今も色々相談活動に回って保護者の方とお話をすると、いやあそんな特別な場所で勉強するのなんてとか、そんな特別なことをしてもらっては困るとか。そういうような話を実際まだ耳にします。ですが、少しずつ、一人一人に合った教育を行うっていうのがやっこの数年で浸透してきてはいます。これからもまだ、特別支援教育の正しい理解っていうものを保護者さん、もちろん教員も含めてやっていかなくてはいけないというのが今の現状です。

そして、みなさんはよくご存じだと思うんですが、今更に動向がどんどん動いていますね。それがインクルーシブ教育のシステム構築に向けた動向ということで、障害のある人も障害の無い人も共に学ぶという考え方が今主流になってきています。これは国際条約に批准したっていうことが一番の大きなものなんです、それにとまってこのピンクにあるんですが、障害者差別解消法というものが成立してまさに来年度から施行されていくというものなんです。ところがですね、これがほとんど認知されていなくて、学校の方でも合理的配慮って何、とか基礎的環境整備って何、とかって言われています。実際には学校を回っていると合理的配慮がされている所もあります。例えば読み書きの苦手な子どもさんがおられる中学校の中には、全ての板書を写真にとってそれを手渡し返す、というようなことをされている学校も実際はあります。色々問題になってるんですけど、iPadを使ってもいいかどうか、というのが検討がされている場所もあります。そのように少しずつ考えは進んできているんですが、まだまだ、というのが現状です。実際になぜLD等専門員が必要かというのは個に応じた支援を考える時代になってきている、というところで理解していただければと思います。

そんな中で、では私の仕事はどういう仕事かというのを説明していきます。ここに書いてあるのは、実は県の特別支援課のホームページに載っているものです。LD等専門員の仕事ここに書いてあります。今は自閉症って言わず、スペクトラムと言っているんですが一応載っているものをそのまま載せておきました。私の仕事、主に相談活動を行うんですが、それプラス校内への校内体制への助言とか、それから啓発活動とかを行っています。現在県下に12名います。東部に5名、中部に3名、西部に4名いるんですが、その中で私は鳥取市の担当で、7中学校区を担当しています。その小中学校が計26校あるので26校と、依頼があればこの校区にある幼稚園保育園に出向いて相談活動をやっているというのが今の仕事です。

相談の形態は2つありまして、1つは巡回相談といって年に2回、小学校中学校を訪問しています。これは個別の指導計画のある子どもさんを中心に見ていて、今の状態が指導に

合っているかを見えています。そして後、校内体制の充実に向けた助言もやっています。もう1つが学校から依頼を受けて学校に向向いて教育相談を行っています。それから、支援連携会議とか、啓発のための研修なども行っています。ここに来るということで4月から11月まで、どれくらい学校に向向いたか、ちょっと調べてみました。まず、教育相談の件数は、363件です。そして相談の回数、何回も関わる子どもさんがいらっしゃるので616件です。一番多かったのが巡回相談で多いときに6月は217件、217人も相談要件として見ていましたので、20日もしあったとしても、本当にすごい人数を、巡回にまわって支援の話をしていきました。

実は今日も午前中巡回相談に行ってきました。今日はお願いますとってわたされた対象の子ども的人数が11人いました。11人を70分ぐらいで8分刻みみたいな感じでずっとまわっていて、その後6人の担任の先生が入れ替わり立ち替わり話をしにこられます。授業中なんかは抜けてこられている先生のことを思うと、本当に忙しい中でやっているの、なんとかその子の困りに寄り添うようなものを話をしなくてはいけないと必死で、12時半ぐらいに終わったときにはなんかもうふらふらになる、そんなような毎日を送っています。後は校内体制の充実のことをお話したりして帰っていくということなんです。

今年度新しくちょっとおこなったことがあるので紹介したいと思います。それがワークショップです。皆さんはきっと読み書きの検査で鳥取大方式というのを聞かれたことがあると思うのですが、鳥取市は去年、鳥取大方式を導入して、読み書きが苦手な子どもさんの検査を行っています。そうすると、苦手な子どもさんにどう支援していいか、ということがやっぱり必要になってくるということで、専門員で相談をして、このようなメニューでワークショップを行いました。なぜ音読が苦手なのか、きっちり意識したうえで、どんな支援をしたいか話しました。そして、楽しく学んでもらうということで遊びをいれながらやっていました。これは絵カードと言葉をマッチングさせてイメージさせることでことばをまとまりとして覚えるっていう練習で、上のようなカードを2文字、3文字、4文字とか、そういうものを全部絵カードにして提供したり、それから下は揚音の練習のための絵カードをつくったんですね。こんなのも実はこれバラバラにして子どもたちがやったんですが、絵札のほうをパッと出して宇宙って言ったら、ちゅちゅちゅちゅっていうのを探すんですね、一生懸命探してとってみたら「うちょう」だった、残念とか言いながらワイワイやるというようなそんなカードを使った遊びみたいなのを提案したらとても好評でした。2回おこないました。やっぱり遊びとかをちゅちゅちゅ子どもは取り入れながらやったほうがいいのかということでこんなワークショップをやってみました。やり方とかも書いて、CD-ROMに焼き付けてお配りするっていうようなこともちょっと新たな試みとしてやったところです。

では教育相談ってどんなことをしているかっていうのをちょっと見てもらおうと思います。黒板が写せない、ノートが上手く取れないっていうことで相談にあがる場合もあります。皆さん、ノートを書く、黒板をノートに写すって簡単ですか。実は簡単なんです、これができない子どもさんって結構いらっしゃるんですね。黒板を写すためには、たくさんのができないと実際は写せません。まず最初は、前の黒板に注

意を向けます。そしてピントを合わせて、そしてなにが書いてあるかをはっきりと見ます。つまり、位置を捉えて形を捉えて、形とその位置をしっかりと覚えて、そしてやっとノートに視線を移します。そして、見本と同じに書くんですが、中には視線を移した途端に「何書いてあったっけ?」、忘れる子どももいるんですね。そして、見たものと同じように書くように、ちゃんと手が動いているか、この力が全部合わさらないとノートを書くっていうことができないんですね。これプラス姿勢も良くないと書けない、ふにやんとしたら書けないし、注意も持続しないとだめだし、意味が捉えられてないとだめだし、文字の変換もできないとだめってなると、「ノートがとれない」って一言で言われて、見てくださってと言われてもどういう所に問題があるかっていうのをしっかりと見極めないと違った支援をおこなってしまうということになります。

文字が読めないのだったら読めないことへの支援、それから形が捉えることができないのならそちらの支援、ということで支援の方法が見立ての差によって変わってきますのでこの辺はしっかりと見極めていく、ということが必要です。さらに、常に書けないって見てみたらしょっちゅう気持ちがそれている子とかずっと爪を触っている子とか、聞きそびれていたり、見るところが苦手ってなると、こういうような支援も必要になってくるので、しっかりとどういう所が苦手できないのかっていう背景を捉えていくっていうのが支援をするために必要になってきます。教育的ニーズって本当に一人一人違います。一人一人にあった支援を考えるって本当に大事になってきています。

発達障害の子をたくさん見ているんですが、最近、発達障害に入らない子どもをたくさん見て欲しいと、言われるようになってきました。こういうようなタイプの子どもさんです。なかなか愛情が上手く育ってなくて、本当に快不快の中で生活しているためにちょっと自分が嫌と思ったらすぐに感情が爆発して相手に向かって行く、そういうような子どもさんがたくさん増えてきています。でも、そういうことで本当に保護者が困ったり、担任が困ったり、学校が困ったりしているんだけど、本当が一番困っているのは本人だということ。ここが一番ポイントになっていると思いますので、しっかりと支援を考えていかなきゃいけない、というのが私の今の思いです。

個に応じた支援、ということで外部との連携も含めてやっていかなきゃいけないんですが、最近思うのは、個ばかり支援しても全く伸びていかない、ということを感じています。ということで、今学習中にみんなの力で何かできるものはないかという提案をしているところです。そういう中でやっぱりいいところ、ちょっといいねっていうプチ褒め、プチ承認っていうのが一番子どもたちのやる気や意欲につながります。障害特性で上手くないっていうときには何とか支援でカバーできるんですけど、意欲が落ちてしまったら本当にここを立ち直らせるのにはすごくエネルギーがいりますので、ぜひそうならないように、ちょっとできたら、「うん上手かった」、そういうような経験をたくさんつませていきたいなっていうことで支援を考えています。

先生方もお忙しいので、いろいろ喋っても具体的な支援って浮かびにくいっていうことで本をよく持ち歩いて、こんな時にはこんな本もありますということで提案をしています。後から並べますので、興味があれば見てください。はじめの

頃は発達障害って何、というような感じで聞かれることが3年前でも多かったんです。中学校なんかは特にそうでした。そんな中で、今はどんな支援をしたらいいですかという感じで教育の方も変わってきています。ぜひ一人一人に合ったもの、支援をしっかりと、あ、ちょっとやるなって気持ちに育ってほしいなというのが願いです。すいません、長くなりました。これで終わります。

(石本) ありがとうございます。今、お話をいただきました。もしかしたら聞いたことのない言葉とかも出てきた人もいるかもしれませんが、さすがに、LD、ADHDと自閉症スペクトラム障害、発達障害に関しては大丈夫ですかね、他の授業で聞いていますよね。あんまり知らないな、って人はまた調べておいてくださいな。

ちょっとだけ補足すると、LD等専門員という肩書でお話いただきましたけど、LD等専門員っていうのはどこにもでもあるわけじゃなくて、鳥取県のものなので、他の県にいったら、それは無いです。同じような仕事をやっているのは、他の県だったら、巡回相談員という方がやっていたりする形かなと思います。今出てきた言葉の中では合理的配慮という言葉がありました。これも聞いたことない人は聞いたことないだろうなという風に思うんですけど、簡単に言うと、そういう障害にに応じた配慮をしていくことなんですけども配慮といっても別にひいきをするわけじゃなくて、みなさんここで目が悪い方はメガネをしたりコンタクトをしていたりすると思うんですけど、そのようにスタートラインは揃えるという意味ですね。合理的という日本語の言葉があまりよくないですけどね。合理的と日本語で言うと、ちょっと経済的にみたいなイメージになるんですけど、元々はリーズナブルという英語なので、説明がつく、というような配慮のことだと思ってください。じゃあ二人めの先生からお話をいただきたいと思います。

(2) パネリスト講演:  
細砂知子 鳥取市立美保南小学校教諭  
(通級指導教室担当)

(細砂) みなさんこんばんは。鳥取市美保南小学校で通級指導教室、ひびきの教室とあって、発達障害の方を対象とした通級を担当しております。私は実は平成21年度鳥取大学のLD等専門員養成研修、今は東京の方に行かれた小枝先生の所の研究室で、現職で一年間、研究させていただきました。翌年平成22年度からこの美保南小学校で通級指導教室の担当をして、今年で6年目となります。通級指導教室っていう名前、名称聞いたことがあるよって方。あ、ありがとうございます。じゃあどんな教室かなっていうのは中々想像つきませんよね。私もこの担当になるまでは通級指導教室って名前だけで、どんな所か実際知らなかったのが今日はそのご紹介もできたらな、と思います。よろしくお願ひします。

今日、大きく通級指導教室についてと、二つ目はひびきの教室について、そして三つ目は、私は通級の担当になる前は通常学級の担任をしておりまして、教師として心がけたいこと、学級担任さんに望みたいこと、この三本の話をしていただきたいと思います。

通級指導教室というのは、通級による指導の目的は個々の障害の克服、改善と環境の適応です。ICFでもうたわわ

いるように共生社会を目指すためにみんなでいっしょに仲良く過ごせる、ということを目的としております。私もそうですけど、きっとみなさんも得意や苦手があると思います。通級指導教室ではその得意なところは伸ばし、苦手なところは少しでも克服したり、ツールを使ってでもなんとかできないかな、という学習をしております。そして、情緒の安定を図りながら社会適応力を育てることが大切だと考えています。平らく言えば、みんなと活動したり、学習したりすることが楽しいなという風に子どもたちにも感じてもらえるような学習をするための教室です。通級による指導というのは、先ほど小谷先生のご説明にもありましたが通常学級に在籍して、通常の学級の学習に概ね参加でき、学習上及び生活上において一部、特別な指導を必要とする児童生徒が対象となっております。なのでほとんどの授業は通常学級で受け、週に1回、2回ぐらいはこのひびきの教室とかで学習をしています。

この通級による指導の制度っていうのは実は最近でして、平成5年からなんです。そして、発達障害のお子さんを対象にするというのは平成18年度から、つい最近です。ちなみに、鳥取県では障害の「がい」の字をひらがな表記というふうにしていますし、DSM-4で障害の名称は変わっておりますが、その辺はごっちゃになっているかもしれません。その所はご承知おきください。漢字を使っている場合もあります。その辺はあまりこだわらないで気楽に見てやってください。

通級による指導の対象となる児童、生徒はここにあげている8つです。先ほど言った平成18年からは6番と7番、学習障害と注意欠陥多動性障害のお子さんも対象となってきました。そうすると、見ていただくとわかりますが、このグラフを見てください。これは文科省のグラフなんですけど、平成18年までは言語障害、言葉の教室の対象のお子さんが青で、黄色が情緒障害です。平成18年からは自閉症、学習障害のお子さんとか、ADHDのお子さんが増えて行って、年々増加傾向にあります。文科省の手引きでは大体一つの教室で10人ぐらいが適応、一対一の対応では10人ぐらいかなと言われていたんですが、今ひびきの教室、美保南でも16名、見させていただいていますし、多い所では米子市の方で20人越えている教室もあります。また、鳥取市では一対一が原則になっていますが、県外では少人数とか色々ありますので、またその運営の仕方は市町村によっても変わってきます。ちなみに鳥取市ではどれだけあるかと言いますと、発達障害対象のひびきの教室は小学校4校、中学校1校です。言語障害の対象の言葉の教室というのは2つあります。ちなみに今ひびきの教室というのは鳥取市で米子とか倉吉さんは学びの教室というふうな名前もあります。

通級による指導における特別な指導の指導時間なんですけど、通級では主に自立活動をします。自立活動というのはその子にとって必要な学習のことを指します。また、教科の補充指導も行います。例えばLDのお子さんで読み書きが苦手なお子さんでは、そこで読みの練習や各教科の補充をさせてもらったりします。また不器用なお子さんとかでリコーダーが苦手な、リコーダー練習が嫌で、音楽の授業自体が参加できないというお子さんも中にはいらっしゃいます。では、ひびきの教室でもちょっとはリコーダーの練習しようか、とかその子が学習に適應できるようなきっかけになるような学習もさせてもらっています。

指導時間は年間35単位から280単位までを標準とあります

が、先ほども申したように年々、希望者、通級に通うお子さんも増えてきますから、なかなか、これで言えば週8時間はとれるはずなのですが、実際は週1時間、よくて2時間とるのが精いっぱいというところで、もっともっと教室が増えたらなあなんていう声も聞きます。

ではどんな勉強しているのかな、というところでひびきの教室ではこのような学習をしています。上手に人と関わることができるようになるための学習、コミュニケーションスキル学習ですね。集中して取り組めるようになるための学習、またみんなと一緒に活動することが上手になるための学習、全般的にソーシャルスキル（トレーニング）的なことが多いんですけども、自分にあった学び方を身につけることができるようになるための学習、LDのお子さんとかで読み書きが苦手だけどこれをしたら得意になるなといったもの、後はほとんど国語の時間は通常学級の授業を受けますから、少し教科書の先取りを扱いながら、実際に学習するときに自信がもてるようなお手伝いをするような学習をしています。そして、自分の得意不得意、自己理解、自分自身が自信をもてるようになるための学習を行っています。それぞれの子どもが、学校や家で楽しく力を発揮して過ごすことができるように、一人一人の子どもに合わせた学習を行うのが、通級指導教室です。

そして、通級指導教室だけで学習しているわけではありません。というのは、やはり連携が大切だからです。なので、在籍校との連携も密にさせてもらっています。少なくとも年に3回はします。まず年度初めに教育相談で児童の実態把握や指導の目当て、この子にとってどれが重点課題かな、こういう力のつきたいかな、という確認をします。そして、年度の途中で教育相談を行って個別の指導計画の評価とか振り返り、今後じゃあ後期はこんなことしようかなという確認をします。そして最後は年度末、今年度の指導のまとめや来年度に向けての相談をします。この時鳥取市では先ほど、大川先生のような、LD等専門員さんにも同席していただいて連携を図っています。また、最低でも年3回ですけども必要に応じて教育相談や支援会議、あと授業参観とかもさせてもらっています。

では、続いて二つ目の柱で、本校美保南小学校のひびきの教室のこの紹介をさせてもらいますね。本校のひびきの教室はこのようになっています。本当はね、欲を言えばもっと広い教室が欲しいんですけど、美保南も大規模校で年々児童数が増えて教室が足りなくなり、急遽一角を設けてもらったので狭いです。なぜ広い教室が欲しいかと言うと、そのトランポリンとか、ボディボールとか見ていただくとわかるんですけど、中には感覚統合が必要なお子さんもいらっしゃいます。本当は思いっきり平衡感覚とかもとるような運動もしたいんですけど、狭いのでまあこの程度で頑張ってるというような形にしております。後、カーテンで隠しておりますがこの中にはいろんなワークとかお子さんに応じたものが入れています。でもすごく明るい蛍光灯をつけてもらっていますので、どこの教室よりも明るく眩しいぐらいな教室だと言われています。また、通級指導教室は児童玄関横の近くにありますが、他校からのお子さんとも通いやすい位置に位置づけさせてもらっています。

ちなみにひびきの教室で使用している教材、教具の一例はこのようになっています。上の方は実態把握です。やはり、

客観的な実態把握もしないと観察だけで「きっとこの子だろうな」という思い込みだけでは指導はできません。なのでいろいろな実態把握を行って客観的なデータを基にします。また教材、教具例として、左の一番下はソーシャルスキル（トレーニング）に関するよくある絵カードですし、真ん中のゲームはすごろくです。後、向こうのワークなど、カーテンで閉められた中にはこういうようになっています。

また、読み書きの苦手なお子さんということで、形を捉える、図と点、図と地の区別がつかないとか、画数が見えないというお子さんの場合はこんな漢字パズルをしてパーツでわけて考えたりとか、あと、ぱっと読めない、逐次読みになって、に、く、ま、ん、ま？のみみたいな読み方のお子さんとかもいらっしゃるんですけど、言葉カードでスラスラと読めるような練習をしたりとかします。視覚認知、形の捉えが苦手だという、大川先生からの苦手さの一例でも出たんですけども、斜め線の捉えが苦手なお子さんとかもいらっしゃいます。書くのが苦手なのを書くばかりの練習してもたいがいじゃないですか。そしたら、その視覚認知をちょっと向上させるようなツートンパズルを楽しみながらしたり、紐通しも楽しみながら手と目の調和を促すというようなことをしながら、その子の持っている力を伸ばすというような学習もしております。本当、これは一例で他にも色々な教材、教具があります。もしご興味あられたらいくらでも美保南小学校にお越しください大丈夫なので、よろしくお願ひします。

ひびきの教室での学習風景、基本的に一対一でしております。ワークをしているとか、真ん中の絵はソーシャルスキルトレーニングで使うもので絵カード見ながらこの後、実際にロールプレイもしたりします。パソコンではヴィジョントレーニングのソフトを使ったりとかもします。あと、iPadで筆順の確認をしたりします。正しい姿勢、姿勢をちゃんとしなさいなんて、ちゃんとの意味がわからないお子さんって、抽象的に言われるとわかりにくいですよ。足を床につけて、とか背筋をピンとって言いながら、一分間じっと自分の体をコントロールしてみようかみたいな学習をしています。

本当にね、どの子も楽しく真面目に学習に取り組んでいて、私自身、いつも「なんて真面目だ」って思うくらいに嬉しくなります。ひびきの教室に通う子どもたちは、苦手なことにチャレンジして、得意なことを伸ばしていく学習をしています。苦手なことばかりじゃなくて、「あなたはこういうところ得意よね、強味よね」という所も実際に理解してもらっているような学習もしています。

家庭との連携、学級との連携ではこのような学習の記録を毎時間ファイルとして送っています。この学習ファイルを活用することによって学級担任さんや家庭との連携だけでなく、子どもお母さんやお父さん、学校の先生、通級の先生、みんながぼくたちのこと、ぼくのことを見守ってくれていると実感して、ぼくは大切にされているんだ、私は大事に思われているんだ、という自己肯定感にもつながっているように感じています。

そして、通級児童に対する学級担任としての配慮をここで考えてほしいなと思います。大きく三つです。児童の状態について正しい理解と認識をもってほしいなと思います。特別支援教育は特別なものでなく、これから教職を目指される先生方、もちろん現職の私たちにとっても必要なことで、正しい理解と認識を持つというのも大事ですので、今

日このような勉強されているみなさんは大丈夫かな、なんて思います。

後、保護者との連携も大事です。保護者の方はやはり最初は自分のお子さんに障害とかあると思うと抵抗がありますし、拒絶もあります。でもその保護者の気持ちのバイオリズムというかそれも頭に入れながら、そして保護者さんが安心して通級できるような、配慮をするためにはやはり学級担任は、学級から通級指導に送り出す際にこそこそじゃなくて「いってらっしゃい」という明るくオープンにして頂けたらと思います。そのために学級の実態に合わせて周囲の理解、子どもたちの理解、協力を得られるような指導も行うことが大事かなと感じております。

特別支援教育というのは、大川先生とも話が被ると思うんですけど、個に対する戦略ではなく、環境を整える、学級経営も大事です。どの子にとっても居心地のよい、居場所のある学級をつくること。学級を安定させるというのは大きく、子どもとの約束を守る、子どもとの信頼関係と、やはり授業が面白くないとたいぎくなります。なので、一貫した指導＋ユニバーサルデザイン教育とかもあるんですけど、学習の面白さも教えていく、教材研究も大事だなと思います。

そして一番大事なのは、大きな環境要因は学級担任です。教師の言動一つが子どものモデルになります。結構批判的に子どもに物言いを言われると、そのクラスの子も達は批判的に子どもを見ますし、肯定的に担任さんが言うと、周りの子どもも肯定的に見ていきます。担任の接し方によって、子ども達は担任をモデルとしてまねるといっているのは見ていて感じることです。次の梶浦先生はその点がとても素晴らしいです。対応のポイントは書いてあるのでまた読んでください。

本当に善悪の基準は大事ですよ。○は○、×は×。良い時は良い、悪いときは悪いをはっきりさせてあげるの大事かな、と思います。後、個に対する支援だけではなく、一生懸命なげで真面目な子ども達、よくある中間層って思われるかもしれないんですけど、けなげに真面目な子ども達を大切にすると学級全体が落ち着きます。それはプチ褒め、プチ承認って先ほど大川先生もあつたんですけど、見ているよっていう承認、賞賛。それが安心に繋がります。そうすると子ども達もお互いに認め合います。

特別支援教育難しいな、ではなく暖かい気持ちで接するだけで、それが本当の意味の特別支援教育じゃないかなって感じます。教育支援の向かう先としてはやはり困っている子ども達の困り感の軽減から、安心感、そして「あ、ぼくってイケてる」手ごたえ感の育成かなって感じています。そのためにも居場所づくり、学級経営の居場所づくりや子ども達一人一人が意欲、自尊心の向上ができるような授業づくり、クラスづくりも必要かなと感じています。そして子どもにできた感、手ごたえ感を持たせてなんとなかなという前向きな気持ちを育てる、子どもに自信と信頼を与えられるように通級指導教室の担当の私も毎日試行錯誤しながら頑張っている日々です。ご静聴ありがとうございました。

(石本) ありがとうございます。先ほどのLD等専門員とは違って、通級指導教室に関しては、どこの県でもどこの市でも基本的にはあるので、皆さんがどこの県に就職しても、関わりは出てくるかなという風に思います。もちろん、自治体とか県によって使い勝手とかはちょっと変わってきますけど

もね。そういった時に、最初に言ったように特別支援教育の悩んでいるのは、先生方、皆さん持っているんですけども、さっき先生に紹介していただいたような、LDの子やそういった子に関してのある種特殊な指導っていうのを全員が身につけることはまず難しいので、そういった時に通級指導教室っていうのが自治体にあって利用できるんだと、利用できる場所があるなということを知っているだけでも違ってくるのかな、という風に思います。じゃあ最後、通常学級における特別支援教育について、梶浦先生の方からお話いただきたいなと思います。

(3) パネリスト講演：

梶浦紀子 鳥取市立醇風小学校教諭

(学級担当)

(梶浦) すごいですね、この時間帯しっかりと起きていて。私はいつも職員室であくびしているような時間帯かな、と思います。醇風小学校、5年担任をしています、梶浦と言います。よろしくお願ひします。二人の先生のように上手には話せませんし、パワーポイントもなかなか使い慣れていませんのであまり上手に作れませんでした、ちょっと聞いていただけたらと思います。

通常学級における特別支援教育について、一応はじめに、と通常学級の学級担任として、日々意識していることを四つ書きましたが今回は学級経営で意識していることっていう辺りを中心に話をさせてもらいます。あとはもちろん子どもに学習の力をつけなければいけないので、授業にも少し触れながら、そしてお二人の先生が話されたのであまり詳しい話はしませんけれども、組織体制のことも少しと、最後、一人の教員として今の自分の思いを話させてもらいたいと思います。

これは今5年生の私のクラスの子どもたちです。先日、学習発表会、「醇風フェスティバル」っていうんですけど、それが終わった時の写真です。どの子も、ちょっと見えにくいんですが、やりきったっていう顔で、笑顔で写っているんです。今これ、クラスの前に貼っているんです。半端じゃなく忙しくて、実はもう毎日へろへろなんですけども、この子どもたちの満足した顔、こういう顔見た時がやっぱり教員しててよかったなって思う瞬間です。この顔が見たくて、こういう笑顔が見たくって一生懸命頑張ってます。そんなので、日々私がちょっと頑張っているぞと少しでもお伝えできたらな、と思います。

子どもによりそって、ということで、担任していて、こんなクラスにしたいとかこんな力をつけたらって4月に思って担任になります。そんな時に、集団で行動できなかつたりとか、友達ともうとにかくトラブルを起こしてしまうとか、そういう子どもがクラスの中にいるとついつい担任としては「困ったなあ」「このクラスの担任か」なんて、多分心の中ではちょっと呟いちゃうんじゃないかな、と思ってるんですけど、実は、困っているのは担任ではなくって子どもなんです。

担任が困っているんじゃないって、主語は子どもだ、ということで、子どもが何に困っているのか。つまり私なんかはみんなと一緒にできないのは「なんでできないの」、「できるようになさい」とか、「同じようにしなさい」とか、「仲良くしなさい」と言うわけですが、子どもが何に困っているの

か、何ができなくて困っているのかを考えないといけない。本当は実はしたいんですよね、子どもは。仲良くしたいんですよ。一緒に行動したいんですよ。だけど、できないんですよ。そのあたりの子どもの困難さを知る、本音に気づいて自分自身、担任が変わる、支援の方法を変えるっていう努力が大事な、子どもによりそって、ということを意識しております。

では、学級経営で意識していること、今23名の担任なんですけれど、大方30人前後、多い時で三十何人の担任だったんですけれども、学級がやっぱり一つにならないと子どもたちは勉強ができませんので、大きく三つ、支援を要する児童とまずは担任とのつながり、それから支援を要する児童と周り今度は横のつながりです、それから周りの児童のその子に対する理解、そういうあたりの三つについてちょっと話をさせていただきます。

まず支援を要する児童と担任の関係が上手くできないと指導ができません。先ほど出ましたように、その子の実態把握でその子なりの支援計画っていうのを立てます。現場に入られると、まずそれはされることと思います。ですので私の方で気を付けていること二つ。

いけんことを、「これはよくなかったね」「そうか、そんな事したん」「それはまずいんじゃない」ってそんな指導的なことじゃなくて、まずは傾聴の姿勢。「んん？」って聞いて、話をまずできる関係になるっていうことが大事です。そうすると子どもって家庭のこととか、友達のこととか、もう好きなものことやゲームのことなんてばんばんできます。そんな話ができるようになると、その子自身のいいところや困っているっていうことが担任として知ることができます。

それからもう一つ。自己肯定感。やっぱりそういう子たちは中々、自分が褒めてもらうっていう場面が少ないんです。さっきイケてるっていう表現がありましたけども。ですので、その子が頑張ってるできるようになったこと、特にその子が一番嬉しいのってみんなと一緒に行動が中々できないのでみんなと一緒にできたっていう辺りをみんなの前でしっかりと褒めてあげる。何が良かったのか、どのような行動が良かったのか。褒めてあげることで自信がついて、その行動が続いていく。この二つを自分と支援を要する子との人間関係作りに意識しています。

それから横のつながりです、支援を要する児童と周りの児童。これはちょっとみなさんも多分経験があると思うんですけど、友達のよさを実感できる活動、エンカウンターって言って、例えばいい所見つけとか、学級活動でされなかったでしょうか。それからありがとうカードでお手紙を出すとか、お互いの友達のよさを実感できる活動をいれることでその子どものよさや存在感が周りの子たちにも伝わる。

後は、友達関係をしっかりと見る。23人ですけどほんとに、中々見落とす日々です。ですので、その子が、「この子いると落ち着くなあ」というような環境を時には配慮する。席替えもそうですよね。この子とこの子が一緒になると、どうしてもイライラしちゃうとかっていったら、ちょっと離してあげるとか、キャンプがあったんですけども、同じイベントに入るときに、その子と一緒にいるとホッとできるなっていうような関係を、ちょっと意識しながらつくるっていうことも担任として大事です。

あとは、この支援を要する子どもたちって友達作りが中々

苦手な子が多いです。どうしても孤独になりがちなので、心を許せる友達作りに担任が上手に手を出してあげるっていうことも必要かなと思います。

ちょっとここは、きつい表現なんですけれども、学級担任というのは学級全員の担任、私で言えば23人全員の担任なので、その子に対して特別な支援はするんだけど、特別扱い絶対にしたらいけないってこと。周りの子に対してです。だから、先ほどにも出ましたが、基本的なルールをはっきりさせて、その子はオッケーだとか、そんなんじゃないかってやっぱり崩さない、一貫する。これがどうしても崩れちゃうと、学級崩壊になります。「何であの子だけいいんですか」とか、「あの子がやってるから私もいいでしょ僕もいいでしょ」そこから始まって、学級崩壊になってしまうので、この辺りを自分自身、長い経験の中、肝に銘じて日々行っています。

あとは、ソーシャルスキル(トレーニング)も皆さん経験されたと思いますけれども、謝り方とか断り方とか、今の子ども達はゲームの世界ではいろんなことするんだけども実際の人間同士の会話が昔ほどなくて、謝ったり断ったりする、そんなスキルっていうのも入れながら、周りとの関係を作っています。

学級担任が、さっきも言いましたけども、そういう子どもの担任になった時に、「ああ、今年はえらいな」って思ってしまう部分もあるんですけども、これは私の経験ですが、支援の要する子どもがクラスにいて、その周りの子どもたちは大きく成長します。そういう子どもがいないクラスよりも。それで、どういうふうになるかって言ったら、まず相手の気持ちをすごく考えることが多くなります。なんでかっていうとやっぱりその子を中心にどう行動したらいいのかっていうのを経験で学ぶ。折り合いのつけ方とか、そういうのをすごく学ぶ。

今の自分のクラスもそうですけど、大縄とかでなかなか上手に飛べないんです。そうすると、クラス対抗をすると、跳べる回数が減ってしまうので、いい思いをしなないんですけども、その子を何とか飛ばしたくて周りの子が練習して、その子が飛べるようになった時は、そんな順位とかじゃなくてとにかく喜んで「よっしゃ」という感じで本当に支え合う人間関係っていうのを築くことができる。そういう意味では、やっぱり特別支援、支援の要する子どもがクラスにいて上手に学級経営することで、大きな力がつくんじゃないかなと思います。

授業で意識していることとしては、授業の見直し、今日も流石大学だな、と思いました。「今日はこういう予定で行います」ってばんと出ましたが、目当てがあって、45分間なんですけど小学校は、今日はこういう勉強するよ、最後にはこういうことができるようになるよっていう話をまず先にしっかりとするというところで、子どもが不安がらずに授業に望めます。

あとは、ちょっとわかりにくいこともありますけれども、さっき言ったように、授業を面白くするために、導入、最初の入り口の工夫をすることとか、それから、こうやってスライドつくるのも、私今回喋るだけかなと思っていたんですけど、実は「こういうのがあった方がいいです」と言われてあわてて作ったんです。でもやっぱりそうですよね。写真一つでも入れると違うので、視覚化というのもやっぱり、どの授業も入れるっていうのが大事だなと思います。

あとは、指示をワンセンテンスで一指示。もう五年生なので、そろそろ、「これしてからあれして、あれしてからこれして」って三つぐらい言いたいんですけど、やっぱり支援を要する子っていうのは三つめは覚えてるんだけど最初のことが覚えてないんです。やっぱり一つの指示で一個できたのを確認して次に行くっていう、これは子育てする時にも役に立つと思いますよ、はい、こういうあたりを意識してます。

あとは机間指導っていう、くるくる先生が回られますよね、あれが一番大事だと思います。授業中は。支援を要する子が一生懸命頑張って、他の子の前で「ほら凄いね」なんてほめられないですよ、やっぱり。「上手に字が書けたね」なんて5年生では言えませんから。でも周りながら「すごい今日いい字だわ」なんて言ったら、その子は「もうちょっと頑張るぞ」。この机間指導ってすごく大事です。だからこんな風に今こうやって威張って立ってここにいますけども、本当に授業中はうろろうして、いいダイエットになつとるかなと思うぐらい机間指導してます。

あとは、皆さんの方が多分勉強されてると思いますが、協働学習って言って、先生対子どもじゃなくて、子ども同士で学び合うってことも今はどんどん授業に入れていきます。

それから、これは私の経験上、保護者との連携の大切さ。やっぱり子どもにとっての親っていうのはもう、大きな力です。ですので、家庭の方が一緒にその子を育てていくっていうスタンスになると全然違います。「何学校？」ってなった時には本当に全然子どもに力がつかないんです。だから、保護者って大事です。一緒に育てて行きましょっていう気持ち。それから、学校のことばかり言うんじゃないで、家での様子とかどんなですか、それから、「学校でこんなことができないので家でできるようにお願いします」じゃなくて学校でこんなこと頑張れますので、家でもこんなことやってみてくださいっていうように一緒に考えていく。

あとは、なによりも、私も男の子がいるんですけども、やっぱり、その子が成長したっていうのを学校の担任の先生に言ってもらえるっていうのは私はすごく嬉しいです。成長と一緒に喜べる、こんな担任になりたいと日々思ってます。

組織体制の方はこれさっき、大川先生の方で出されてますのであまりしませんが、支援っていうのは、担任と保護者だけではないっていう図です。学年団、今はちょっと少なくなってきましたが、私前任校におったときは四学級あったので、そういう学年団とかそれから様々な担当の先生、その先生たちと一緒にっていきますので、その学校にはこうやってきちんと担当とか、それをするための委員会、会議のようなシステムがしっかりあるということです。ですので、そのために担任としてこれを活かすためにはまずは悩んでいることを一人で抱え込まないってことです。それから、いろんな情報交換をするってことです。職員室の中で。

あとは、いろんな担当の先生に相談すること。これ、私たちの中で「ほうれんそう」って言ってます。報告をしたり、連絡をしたり、相談をすることで、色んなアイデアをもらったり、それから色んなことに気づかされたりする。つまり一人じゃないからみんなでやっという、という組織体系のことです。

ひびきの教室の先生と色んな話をする中で、専門的な立場からの意見はとっても参考になります。その子にも支援もできるし、自分のクラスの子も、実はなんか持ってるんじ

ないかな、と思うんだけども中々おうちの方が認められなくてそういう所に行けない、そういう子どもたちにも支援ができる、とっても参考になるなあと思ってます。

最後ですが、教員を続けて、特別支援の必要な子どもに対しての教育っていうのは、その子だけじゃなくて全ての児童にとって大切なものだってことですので、今日のこの研修はとっても大事だなと思います。それから、私はこの特別支援、支援を要する子と関わりながら、子どもの心の声を聴く努力を若い頃はしてなかったな、と。なんかがむしゃらにやっと思った気がするんだけど、心の声を聴く努力を意識しました。

あとは、やっぱり感情が抑えられない子がいます。かっとなつたらもう、手も足もでない。もう教室も飛び出したり、わってなるんですけど、そういう時に自分も同じようにかっとなつちゃうと大変なことになるんですよ。やっぱり、すごく自分が忍耐力ないな、と感じましたので、ぜひ、先生になられる方、忍耐力を鍛えて欲しいなと思います。やっぱり、忍耐力って大事だなと思いました。

あとは、子どもにばかり、相手のことを思いやる優しい子になろうねって日々言ってるんですけども、やっぱり子どものことを思いやって相手の立場に立って考えるっていうことも、日々今、自分が反省しながら頑張っているところです。

一人で抱え込まず、支える人間関係づくり。つまり、今みなさん大体年が近いんですけど、職員室って本当にもう、親子ぐらいの年の差の人たちが一緒に働いているんで、やっぱりそういう辺りでみんなが話し合える人間関係づくり、ネットワークづくりが大事だなと思ってます。

こんな風に、共に生きる、若い先生方、若いこれから先生になられる学生さんたちとこうやって一緒に勉強できましたことを、感謝して、これで私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

#### (4) 補足および会場からの質問とパネリストの回答

(石本) ありがとうございます。三人の先生方にお話をいただきました。今もね、最後まで大きなお話がありましたね。ネットワークを築くとか、人間関係を作っておくっていうところでですね。学校の先生の中には、まあ今日来られた先生方は違いますが、相談するのが苦手っていう方も結構いるんですよ。学校の先生っていうのはまあ、基本的に学級のこつっていうのは自分一人でやらないといけないって思っている方がいるので、丸抱えしてしまったりする方もいます。でもやっぱり一人で全部できないので、そういった時にネットワークを作っておいて、同僚の先生だったり、校長先生だったり管理職の先生だったり、外部の専門機関の方に相談するっていうのは、一番大事なスキルですよ。それはやっぱり意識しておくことは必要ですよ。

最初の流れで説明しましたが、ここから質疑応答ってことにしたいんですけども、最初に、僕の方からちょっとね、基本的なところを確認しておきたい、聞いておきたいなと思います。

今日はね、LD等専門員とか、通教指導の担当の先生にお話しいただきましたけども、通級指導教室の担当の先生っていうのは、別に法律上は特別支援教育の免許を持ってないといけないとか、何々の資格がないといけないというのはないの

で、みなさん就職してもなりうるんですね。じゃあどういう経緯でなられたのかな、っていうことがやっぱり気になると思うんですね。教員になった時に、どういう人がそういう立場になるのかなとか、私も行くことがあるのかなということが気になると思うので、どういう経緯でLD等専門員とか、通級指導の担当になられたのかな、というのを聞かせていただけたらと思います。

(大川) LD等専門員になった経緯なんですけど、実を言うとして私は担任をしている時に、子どもにどうしても文字が読めない子どもがいたんですね。それから、書けないんです。それでも聞いていることはよく知っていて、聞いたものは全部読んでわかるのにどうしても書けなくて、それが不思議でたまらなくて、どうしたらいいんだらうって常に考えていた時に、「勉強してこないか」と声をかけられて、実は鳥大の、先ほど、細砂先生の方から言われた、LD等専門員研修に行っていないかということでそこに行ったんです。でも、そういう専門員研修だということを実は知らずに、勉強ができると思っただけで、実はそこは専門員を養成する研修だったということで、終わったとたん専門員になりましたということです。(会場 笑い声) はい、以上です。

(細砂) 実は私も、大川先生と同様です。前任校が小学校勤務だったんですけど、その前は鳥取養護学校って言って特別支援学校に勤務しておりました。通常学級、小学校勤務した時に、通常学級の中でも気になるお子さんが色々いらっしやいまして、勉強したいなと思って小枝先生の研究室の門を叩いたら最後、じゃなくて、(笑い声) 一年間研修したら、次の人事の時に通級指導教室担当と言われたので、なりまして言っただけではないというのが正直な話です。

だけれどやはりなったらなったら、どの現場でも、通常学級の担任ももちろんそうですし、特別支援学校の教員の時もそうですし、どの立場になってもやはり子どもと関わることで、しんどい面もあるんですけどそれ以上に楽しい面もあったり、充実感を感じます。経緯と言うと、もしかしたらみなさんね、本意じゃない職場につくかもしれないですけど、どれも楽しいと思います。

(石本) はい、ありがとうございます。結構みなさん、知らない方も多いんですが、特別支援学校と特別支援学級は、特別支援教育の免許持ってないとならないと思っていたら、そんなことはないんですね。現状の法律は、特別支援学校も特別支援学級も、幼小中高の免許を持っていれば担当することがあるので、全然思っただけでなく異動することありえますからね。本当に。

本来は、通級指導教室とかも、そういった専門の先生がいる場合はね、その専門の先生が行くという形で、ある程度勉強された先生が行くというのが、一番いい形です。鳥取ではそれができているのでいいことなんですけど、自治体によっては、本当にそういうこと関係なく通級指導に移動になる先生もいるし、一番最悪なパターンはこの先生、担任持たないから通級指導の担当に飛ばされるという形も僕は見たことあるので、本当はそれ、絶対良くないんですけどね、そういうこともありえます。だから誰でも全然関係ないってことはないと思っただけでなく、いいのかなと思います。

もう一つ、通級指導教室で情緒障害も対象として入っていると思うんですけども、情緒障害っていうのは一番ね、なかなかみなさん、ピンときにくい所があると思うんですけども、実際情緒障害は色々なことを含んでいて、発達障害のような子も情緒障害という時ありますし、他の子も情緒障害と言うこともあると思います。情緒障害の子で通級指導に来る子ってどんな子なのかなということだけちょっと教えていただけたらと思うんですが。

(細砂) そうですね、鳥取県の場合は情緒障害のお子さんは通級というよりは希望館の方とか、適応指導教室に行かれることが多いですね。情緒障害というのはやっぱり気持ちの面で不安定になるとかそういうお子さんなので、通級ではその二次的な障害なる手前で防いで、その子が適応するように学習しようという所もありますが、中にはやはりASDのお子さんで、ちょっと気持ちが不安定でっていうお子さんもいらっしやいます。やはり、不安定になるというのは、暗黙の了解がわかってないとか人の距離感が計れないという所で、その社会性の不安もあるので、来られるのです。

あともう一つは、LDのお子さんで、頑張っても中々、思うように結果が得られなくて、もう学習に対して諦めてしまいがちなお子さんもいらっしやるんです。そういうような子でも、情緒障害として対応する所もあるんですが、鳥取市の場合では、やはりひびきの教室は情緒障害というよりは発達障害のお子さんが対象で、情緒障害のお子さんは適応指導教室とか、分校、希望館のようなところに行かれるの方が、多いかなって感じます。

(石本) ありがとうございます。じゃあ情緒障害単独で来られる方は基本的にはあまりいない、ということですよね。

(細砂) というのは実はですね、不登校の子どもたちは扱わないというのがあるんです、鳥取市の場合には。ただ他県の場合はそんなことありません。先日、板橋区の東京都の通級指導教室の校長先生方が本校、ひびきの教室の見学に来られました。やはり、都道府県によっては通級指導教室に来られるお子さんに情緒障害のお子さんもいらっしやいますし、担当者も専門の研修を受けてない、若手の、新採の方も通級担当者にいらっしやるそうです。

ただ板橋区の場合は一対一ではなく、複数で、35人を5人で見るということなので、年配の担当の先生もいらっしやるので不安になることはないようです。そういうこともありますので、鳥取市では情緒障害のお子さんはあまり扱いませんが、他県では扱う例もいっぱいありますよってことです。

(石本) ありがとうございます。そういった特別支援に関するとか、通級指導も、LD等専門員といった肩書もそうですけど、結構県によって、自治体によって違ってくるので、みなさんがどこに就職するかによってそこでのやり方っていうのは変わってくるかなと思います。じゃあみなさんからぜひ質問をあげていただけたらなという風に思うんですけども、なにかこの機会に現場の先生方に聞いておきたいことがある方がおられたらぜひ、質問をあげていただけたらなと思います。ないですか。(空白) みなさんの中で特別支援学校の免許をとるって方はどれくらい居ます?結構いますね。特別支援

学校の免許をとったらね、特に、最初通常学校に赴任しても、すぐ通級指導教室だったりとかね、そういう所に行く可能性はちょっと高くなるかなという風に思います。あの、LD等専門員も特別支援の免許もってるかどうかとかは基本的に関係ない、ですかね。

(大川) 基本的には関係ないですね。でも一応今、鳥取県では、専門員研修を受けている人、そういう人しかなくていいです。

(細砂) それと鳥取県の場合は、特別支援学校に勤務されて、免許のない方はとるように、その制度がありますので、結局みなさん専門性を高められようとされています。

(石本) 通級指導教室も、特別支援学校の免許は現状必要ないですか。

(細砂) ないとは思いますが、知っている限りみなさん持っておられますね。

(石本) ああそうなんですか。さきほども言ったんですが、鳥取県はそういうふうによくある意味運用されているので、そういう専門の先生がつかれてることだと思うんですけども、そうじゃない所もあるということですね。

質問のある方いらっしゃいますか。はい、どうぞ。

(質問者A) LD等専門員の先生に質問なんですけど、一人の質問時間が8分くらいみたいなのをさっき言われて、それは私の中では短い、と感じたんですけど、短い時間の中でどういう風にこの子と向き合っていくたら、子どもの支えになってあげられるのかな、どういうことに気を付けて相談に乗ってるのか、ということを知りたいです。

(大川) はい、わかりました。先ほどの8分というのは実は本当にとっても少ない例です。依頼相談っていうのは本当に一人の子どもをじっくり見て、そして何度も関わっていくようなものが多いんです。本人も困っているし、先生も困っているしということなら、そこでしっかりと、どこが一番その子にとって困り感のなかなっていうのを探っていくみたいな、というのが一番のポイントです。そのポイントの一つは観察で、子どものまずノートを見たり、黒板を見る様子を見たり、それから掲示物を見たり、ロッカーを見たりっていうことで整頓がきちんとできるかとか、きちんとノートを書いているかとか、友達の刺激に弱くないかとか、そういうものをまず観察します。その後、本当に5分くらいの話し合いの中に、まず先生に、どうですかっていうことを聞いて、先生が今一番悩んでおられることとか、そういうものを聞く中で、一番今こういうことが大事じゃないかな、というのを提案しているようにしています。

中々、提案をするにしても、先生方にも理解がしにくい場合もあって、それで結構よく持って行っているのが、こういう本です。こういう本を使ってみませんかとか、今は無料でダウンロードできるようなサイトとかがあるんですね。先生方も使いやすいだろうってことでそこを紹介することもしょくあります。ちょっとだけ例を出すと、例えば、とても語彙

が少なく困っているっていう子どもさんには、語彙指導って言って、言葉の意味をしっかりと伝えて、それを使える、例文づくりなんてことをするんですが、そんな時なんかにはいい方法ないかなっていうのでよく紹介するのがこういう本で、「ちょっと難しい100の言葉」です。こんなんでされてみませんかかって開いてみます。

これは上に言葉が載っていて、ここに意味が載っていて、文をつくるっていうようなワークなんですね。これのよさはちょっとこれかなと考えながらやっていくということができるところです。こういうのを試してみませんかかっていうとやってみますって言ってもらえたり。一分間だけやってみませんかかって提示したり。それから、ビジョントレーニングとかだったら5分でできるとか、なるべくそういうような形で具体的なものと、やってみますって言ってもらえることが多いので、そういうようなものをいつも提げて出かけて行っています。

(石本) ありがとうございます。他に質問のある方いらっしゃいますか。はい、真ん中の方。

(質問者B) 通級学級について質問なんですけれども、通常学級でも、環境が変わってしまって落ち着かないという話が出てきたんですが、別の授業の中で、他の学校の、隣の学校とかの生徒が、通級学級がその学校にない場合、隣の学校と一緒にいって、そこの学校の子たちと一緒に過ごすっていう場面があるっていう風に聞いたことがあって、そういう場合、またその環境が変わってしまうので、余計に落ち着かない状況が生まれてしまうんじゃないかなという疑問も生まれたので、その辺のことを教えていただきたいと思っています。

(細砂) 通級指導教室の場合は、ない場合がありますよね、実際美保南でも、同じ中学校区とかちよつと隣の中学校区からお子さんが勉強に来られます。基本的に一対一なので、他のお子さんと一緒に学習することは鳥取市の方はないんです。

それでも、環境が違えば落ち着かないってありますが、人間だれしも同じ環境では生活できませんよね。なので最初はすごく緊張されてます。なので落ち着いて、というか居心地よくするためにまず、自校の子どもたちに理解教育と言って、ひびきの教室が本校にあって、みんなだって他の学校に一人で勉強しに行くのはどきどきするよね、じゃあどうしたらどきどきしないって言ったら、明るく迎えてもらったらとか、出てきます。じゃあおはようとか、返事はないかもしれないけど声かけようねとか、じろじろ見ることは無いんだよとか。

児童玄関の横なので結構下校時はうるさいんですよ、でも他の時間もすることがあるので静かに通ってね、というような形で周りの子の理解教育、プラスその子も慣れてくると、教室での学習はすごく楽しんでくれますので、楽しみに来てくれるので、最初の初めての緊張する環境が好きな環境にかわっていきます。そんな経験をする、他の新しい環境に行く時でも、どきどきはするけども、もしかして楽しいことがあるかもしれないという風な意欲につながってくれてるんじゃないかな、なんて感じております。

あともう一つは交流学習と言って、通級指導教室ではないんですけど、特別支援学校が一日交流とか、交流学級の場は

色々あります。そういう時と同じように受け入れる側も学習になりますので、暖かく見守るということと、慣れていくということと、やはりその子がこの学習で何をするかわかるような見通しのもてる、構造化できるようなことも、工夫はしています。お答えになっているかわからないけども、以上です。

(石本) ありがとうございます。

では、時間になっておりますので、あらためて先生方に拍手をして終わりにしたいと思います。ありがとうございます(拍手)。

## テーマ2 「不登校対応の実際」

(石本) 今日のテーマは「不登校への対応の実際」ということで、現職の先生方からお話をお聞きしていこうと思います。

最初に、このテーマの趣旨を説明します。「不登校の児童・生徒の割合」は、小・中学校の場合は2000年くらいから、微妙に減ったり増えたりはしていますが、ずっと高い状態です。中学校で3%くらい不登校の子がいるということは、40人学級だったら必ず1人はいるという確率です。皆さんが中学校の教員になったら、きっとクラスに1人はいるだろうと期待してください。高校の場合は、退学してしまう子もいるので、単純に小・中学校と比較するのは難しいのですが、1.59%ということになっています。なので、今まで不登校という言葉あまり意識したことなかった人も、教員になった時には、きっと不登校の対応をすることになると思います。そこで、今日は、学校で実際どう対応をしているのかということについて、お話を聞いていきたいと思います。

今日の流れとしては、趣旨説明、パネリストの先生方の紹介、その後、順番に3人の先生方に話を聞いて、最後に質疑応答の時間を設けたいと思います。

(小谷) パネリストの先生を紹介します。

まず一番こちら側の先生ですが、八木浩子先生です。八木先生は鳥取県いじめ・不登校総合対策センターの指導係長をしておられます。湖東中学校のすぐ近くに鳥取県教育センターがありますが、その中にいじめ・不登校総合対策センターがあります。元々、中学校の先生です。

次に、村口理英先生です。鳥取市立南中学校の先生です。村口先生は小・中兼務教員といって、また話があると思いますが、南中学校の先生ですけれども、その南中学校の校区内にある小学校の先生も兼ねておられます。

最後になりましたが、清水ゆかり先生です。清水先生は、この大学のすぐ近くの鳥取市立湖山小学校の養護教諭の先生です。先生は、湖山小学校の前は中学校にも勤務されて、小・中学校両方の経験があります。

それから、先程、趣旨説明をしましたコーディネーターは、教員養成センターの石本先生です。

(1) パネリスト講演：  
八木浩子 鳥取県いじめ不登校対策センター  
指導係長

(八木) みなさんこんにちは。鳥取県教育委員会事務局いじめ・不登校総合対策センターの八木と申します。私のパワーポイントで、このような不思議な表紙を付けさせていただいていますが、これは鳥取県の方で、学校の先生方に不登校の対応をして頂くのに、その援助となる手引きを作っておりますので、その表紙をそのまま使わせて頂いています。学校の

先生方へは、そのような支援も、さらには、当センターが実施している取り組みもあります。それもご紹介したいと思います。

最初に「不登校の定義」を載せております。これは、皆さんも把握しておられるのではないかと思います。年間30日以上欠席をした者の内、病気や経済的な理由によるものを除いたものが「不登校」と定義されまして、先ほどの統計や私どもの示す統計等には、この定義で不登校の児童生徒が計上されてくるものであります。

次に「不登校のどのようなことが問題なのか」という当たり前のようですが、少し話させていただきたいと思います。学校で子どもが学ぶことをこのように挙げてみました。大きく分けて「学習」、それから下の3つが「社会性」というふうに考えられるのではないかと思います。不登校が長期化することで、学力保障、そして、社会性が育っていくことに問題が生じるため、将来、社会人として自立していくことへの影響があります。不登校によって子どもたちは不利益を被るということを肝に銘じて、学校の先生方は不登校解消や不登校の未然防止に向けて取り組んでおられます。

また、ここには載せていませんが、最近、不登校であることで進路の問題も出てくる、進路の選択が狭まったりすることも問題であろうと言われてます。

10年近く前の古い調査ですが、全国で行われた調査で、不登校を中学校の時に経験した人の5年後、20歳の人たちに就職や進学等の状況等を調査したものがあります。その中では、就職するときや人間関係作りに非常に困ったとか、苦労をしたとか答えている率が高かったという結果も出ています。このように不登校は、子供たちが不利益を被ることになるということをお知らせしておきたいと思います。

先ほどは全国の統計でしたが、ここにお示するのは鳥取県の状況です。グラフでは、上が中学校、真ん中が高等学校、そして下が小学校です。

小学校は少ないように思われますが、グラフを見ると、少子化の時代にあって、不登校が減っていない、少子化の中でも不登校は微増傾向にあるということは、鳥取県でも同じです。

また、中学校は平成22年には500人を上回る不登校生徒数でしたが、その後減少が続いています。しかし、昨年度は434人で大きく増加していて、危機感を持っているところです。ここについてはもう少し後で詳しくお話ししたいと思います。

高校では、平成24年度を境に減少しています。平成24年度から平成25年度にかけて、51人不登校生徒数が減っている中の50人は定時制の不登校の減少だったという報告があります。さらに、高校では26年度も不登校生徒数が減少していますが、25年度から26年度にかけては、高校2年生、3年生の数も減っていたという報告になっています。

これは、先ほどもおっしゃいました不登校の出現率の推移です。一番下の小学校のグラフの点線が全国平均ですので、鳥取県では小学校の不登校児童は全国平均をやや上回る率で発生しているということが言えます。真ん中の2つのグラフが高校で、上の2つのグラフが中学校ですが、中・高では全国平均より高くなったり、低くなったりということを繰り返しているような状況です。

この下のグラフは、平成25年度と平成26年度の不登校児童生徒数を学年別にしたもので、濃い色の棒が25年度で、薄い色の棒が26年度です。鳥取県の特徴として、まず小学校の4年生とか5年生で不登校の児童が増えています。全国的には小学校3年生で増えるということがよく言われているようですが、小学校の中学年は成長の変わり目であったり、人間関係に変化が見られたりするような時期であることや、学習内容も具体的な内容から抽象的な内容へ進んでいくようなこと等が、この不登校の増加に関係があるのではないかと言われています。また、中学校1年生でも大きく増加しています。小学校から中学校へ入学するので、担任も学級担任制から教科担任制に変わりますし、学習内容も難しくなっていきます。また、複数の小学校から友達が集まって人間関係も大きく変化します。このような変化を「中1ギャップ」と呼ぶこともあります。

このグラフにはないのですが、鳥取県では、今から10年以上前に、中学校の不登校の出現率が全国で1位だった時代があります。平成21年度と平成22年度を見ていただくと、ちょっと示されていますかね。小学校の6年生から中学校の1年生に上がるときの不登校の増加が3倍以上になっています。ここからここもおよそ3倍になっています。そこで、小学校と中学校の先生が連携して、小学校の高学年の頃から中学校の先生が小学校で授業したりとか、小学生が中学校での体験学習をしたりして、中学校へ上がるときのハードルが低くなるような取り組みをしたので、最近では小6から中1への、このギャップが緩和され、不登校の増加がおよそ2.5倍までに減ってきていると考えています。

もう1つ、このグラフで見ると、中学校2年生の不登校生徒数がこんなに多くなっているのですが、そのことについて次の資料を見ていただきたいと思います。このグラフは先ほどのグラフと同じものですが、25年度と26年度を分けています。それから、水色はその年に不登校になった児童生徒の数で、ピンクは昨年度も不登校だった児童生徒の数です。私たちは、ピンクのものを「継続不登校児童生徒」と呼んでいます。平成25年度の中1は、去年も不登校だった人と今年初めて不登校になって人を合わせると、ちょうど100人でした。この中1の人たちは次の年度は中2になるのですが、継続の人を見ると100人なので、鳥取県では、この中1の人たちは、全員が次の年に不登校になっていたという、これは非常にショッキングな結果でした。不登校が次の年も継続しているのだという課題が見つかったことになります。先ほど「不登校は、児童生徒が社会性の育成等で非常に大きな不利益を被るのだ」ということを申しましたが、不登校が長く続くことは、子どもに増々問題を課しているのではないかと思います。同じような傾向は、数は少ないのですが小5とか小6でもあります。小学校のなかでは、継続の不登校が多いということが、このグラフから分かります。

次に、不登校の原因はということですが、鳥取県がしている調査で、不登校となったきっかけを多し順に並べています。3番目の「遊び・非行」というのは、中学生に特徴的なきっかけで、小学生では非常に数が少ない状況です。それから人間関係とかがきっかけなのかなと思うのですが、忘れてはならないのは「学業の不振」という問題が出てきているということです。

調査では、これらのきっかけが挙げられているのですが、不登校の原因というのはどう考えていったらよいのでしょうか。我々の一つの考えとして「ストレスの壺」という考えを持っています。人間は心の中にストレスを溜めておく壺を持っているという考えで、その口が広い人もいれば、狭い人もいます。壺が大きい人もいれば小さい人もいます。色々な壺を心の中に持っているとして、時には蒸発していつか空になることもあるかもしれないのですが、ストレスが溜まっていつか、最後に入ったストレスを我々は「不登校の原因」と考えてしまっているのではないだろうか。実は、今まで入った様々なストレスが壺の中に溜まっているのではないだろうか。こういう考え方も不登校の支援に必要なのではないかと考えています。

この壺に入ったストレスのなかでも、もちろん解決できる問題もあります。例えば、学校でいじめがあったとか、学習のやり方を工夫したら、もう少し学力の問題が解決できるとか。そういう解決できる問題には学校は積極的に取り組んで、その子の不登校の状況を和らげ、解消に向けた努力をしていきます。しかし、中には、今までの養育の問題だったり、難しい家庭の問題だったり、なかなか解決できない問題もあります。そういう場合でも我々はそれを原因と考えずに、「今、何ができるか」というふうな考え方をシフトして支援していくことも大事なのかなと考えています。原因というものに、あまり固執しないことも必要なかなと思っています。

次に、鳥取県で行われている不登校への取り組みを紹介します。

まず、今日は、学校の先生も二人来ておられるのですが、学校では不登校は担任の先生だけではなく、様々な立場の先生がチームとなって関わっておられます。担任の先生が1番の支援者になることは間違いないと思うのですが、養護教諭の先生とか同じ学年の先生とか、中学校や高校であれば部活動の先生とか、相談室の先生とか色々な先生がそれぞれの役割を持って関わっておられます。

2番目として、学校で、子どもたちが悩みや不安を相談しやすい体制づくりができるようなお手伝いをしています。「スクールカウンセラー」と呼ばれる相談のプロの方に学校に行ってもらっています。子どもたちの相談に直接のって頂くのはもちろん、先生方の相談力とか対応力とかをアップする指導を行って頂いたり、子どもの不登校解消へ向けて一緒に考えて頂いたりしています。

3番目として、その子が置かれている環境に視点を当て、専門機関と連携して支援する仕組みづくりを進めています。例えば、最近新しく注目されている「スクールソーシャルワーカー」という役割の方を学校に配置しているところがあります。家庭とか、その子が不登校でいる背景とかに着目して専門機関と連携したりして、学校だけではなくて、必要な相談機関と一緒にその子の不登校を支援していくという

コーディネーターのような役割をさせていただいています。

4番目として、「学校以外の通えるところづくり」ということで「適応指導教室」を設置しています。学校へ通うのは厳しいですが、別のところなら、ちょっと気持ちが楽に通えて、そこからエネルギーを蓄えて学校に戻ることを目指すという仕組みです。私が勤めるセンターにも、高校生年代以上の不登校の生徒や不登校を経験した青年が通っている教育支援センターというものを設置しています。このセンターを利用したり相談に来られたりする方は、次の3つに大きく分かれるように思います。1つは高校生の不登校の相談です。現在学校を休んでいるとか、休学中の方が相談に来られます。留年とかになることも多いのですが、中には「留年して次の年度から1つ年下の人たちと頑張ろう」と考える方もあります。実は、高校生には、それは非常に大きなハードルで、「留年して頑張ろう」という方は非常に少ない状況です。休学や退学をして「高認試験」と呼ばれる高校卒業程度認定試験に挑戦する人もあります。それから、学校をかえて、より通いやすい、気持ちに負担なく通える定時制とか通信制への転入や再入学を考えるケースが多くなっているように思います。それから2つ目は、通信制の高校に通いながらとか、あるいは高校を卒業したりしてとか、または高認試験を受けていたりして、大学とか専門学校とか、次の進路に向けて頑張ろうとしている人たちです。3つ目としては、ここに「就労」ということを書いているのですが、学校を修了して、このセンターに通いながら次の進路を模索している人たちです。若者サポートステーションというハローワークと連携した機関ですけど、このセンターも連携していて、就労へ向かってのお手伝いもさせていただいています。私は中学校に勤めていたんですが、去年から、このセンターで高校生年代以上の不登校の方に接するようになりました。中学生より高校生、高校生よりもっと年代を重ねるごとに、社会自立とかには時間がかかるのだと思うようになりました。先生方にとっては、小学生・中学生の年齢が低い時の不登校と高校生年代やもっと年が上の方の不登校とは、支援の仕方がちょっと違ってくるのかなと感じています。

最後に付けているのは、「不登校の未然防止」ということです。もう皆さんのレジメには答えが書いてあります。ここで申し上げたいことは、学校がすべきことをきちんとすることが、不登校の未然防止にもつながっていくのだということです。

一つは学習、分かる授業や魅力ある授業づくりです。もう一つは人間関係づくりや社会性の育成です。授業が分かることで、学校に居場所ができると考えています。そして、子どもと先生だけではなく、先生が、子ども同士の人間関係を上手につくっていくことで「絆」ができる。この「居場所づくり」と「絆づくり」が不登校の未然防止にもなり、いじめの未然防止にもなると考えています。

最後に「教員を目指す皆さんへ」というスライドを付けています。不登校の中学生や高校生以上、それから引きこもりを心配する人たちの支援を何年かやってきて思っていることで、若い先生方、先生を目指す皆さんに伝えたいことは、子どもたちの良いモデルになってほしいということです。私どものセンターに通ってくる青年のなかには、不登校や家に来た時期が長くて、非常に狭い人間関係しか経験していない人

がいます。家族とほんの限られた友人、それさえもない人もいます。それから、学校で関わってきた先生、これがその子の全ての人間関係だというような子どもにたくさん会ってきました。この子たちは社会に出ようにも、「こんな大人になりたい」というような人生のモデルの選択肢が非常に少ないのです。たくさんの人間関係の中で育ってきた人には、「あんな先輩になりたい」とか「あんな先生になりたい」とか、アルバイトで知り合った「あんな社長さんのような人になりたい」とか色々なモデルがあると思います。そういうモデルが非常に少ない子どもたちだなと感じます。教員になられたら授業の指導力等、色々なことを問われることになると思いますが、是非、人間力を磨いて、たくさんの子どものうちの中に入った1人の不登校の子ども、たった1人かもしれないけど、その子どもの心に残るような「僕のことを大切にしてくれた、あんな先生がいたな」とか「僕もあんな大人になりたいな」と思えるような関わりをして頂きたいと思います。

教育基本法でも「教育の目標は人格の完成です」と書いてあります。人格の完成は、先生方の人格を持って行われるのかなと思います。

話を終わらせて頂きます。ありがとうございました。

(石本) ありがとうございます。八木先生の方から、不登校によって、その児童とか生徒にどんな不利益があるかという話をしていただきました。その本人に不利益があるというのは当然のことながら、もう1つ持っておいてもらいたい視点としては、やっぱり12万人ですよ。小・中学生で12万人不登校の子がいるということ。教育というのは、そもそも子どもたちに社会に出てもらって、社会を担ってもらうためにやっているのに、12万人もの子どもたちが、公の教育から外れているということが社会的な損失でもあるという視点も持った上で、不登校を考えていった方が良いかなと思います。

次は、村口先生の方からお話を聞きたいと思います。よろしくお願いします。

## (2) パネリスト講演：

村口理英 鳥取市立南中学校教諭

(村口) こんにちは。先ほどご紹介いただきました、南中学校の村口といいます。私は、現在ですね、特別支援教育主任という仕事と教育相談部長という仕事と不登校対応教員という仕事と小・中学校兼務教員という仕事と4つの仕事をしています。

八木先生は鳥取県全体、それから不登校ということについてお話をされましたが、私は中学校教員の立場でお話をさせていただきます。

「不登校」ということですが、私は「学校不適應」という言葉を使っています。「不登校」ではなく「不適應」としたのは、学校に来れなくなってしまった生徒を支援することだけが学校の仕事ではなくて、学校に来れなくなる前に対応していく、何とか学校につなげていくということが大切だと日々感じているからです。

今日は、先ほど4つの仕事をしていると言いましたが、不登校担当教員という立場でお話をしようと思っています。これからお話をすることは、中学校が実際にやっている具体

ですので、皆さんが、もし中学校の教員になられたら、参考にしていただければと思います。

これからお話することは、お配りしていますレジメにもあるように、大きく4つのことです。

まず1つ目です。「生徒の実態と背景」ですが、これは本校、南中学校の現状です。本校は鳥取駅の南側にあります。約600人全校生徒がいます。学級数は各学年7クラス、支援学級が5クラス、教員数が約60名の学校です。先ほどもありましたが、欠席日数が30日を超えている生徒というのは、本校は20人以内です。具体的には11月末現在で16名です。毎月、月例報告という形で鳥取市の教育委員会に欠席している生徒の状況を報告しています。その中で、欠席日数とか生徒の様子であるとか、関係機関とどのようにつながっているのか、それから、もちろん欠席の理由についても記載して報告をしています。先ほどの八木先生のお話にもあったように、欠席理由を書くときに1つに絞れない生徒がほとんどです。ですので、そこにあるように複合という欠席理由を記入しています。16名の生徒全員複合です。ただ、30日を超えている生徒の中にも、保健室であるとか、あるいは、校内にある相談室という教室以外の場所で活動している生徒も含みます。そういう子も入れて本校16名という現状です。

では、その生徒たちが不適応を起こした背景は何なのかというと、私はここに挙げてある3つのことが主な背景になるのではないかと考えています。

1つ目の「家庭環境・成育歴」というところですが、中学校になってから不適応を起こす生徒がないわけではありませんが、不適応を起こした生徒について、小学校の時はどうだったのかな、あるいは、幼稚園や保育園の時はどうだったのかなと、ずうっと遡って様子を探っていくと、例えば、その時期毎に行き渋りがあったりします。「保育園に行きたがらなかった」とか、「小学校も途中からは行けるようになったんだけど、最初の頃はちょっとしんどそうにしていた」とか、色々なことが出てきます。また、小学校は比較的校区が狭いということもあって、先生が子どもを迎えに行かれて連れて来られる場合もあります。このように、実はサインが中学校に来る前から出ているということが分かります。それから、欠席が進んでいって、家庭と連絡をしていく中で、どうも家庭の中に色々な問題を抱えているのではないかとというようなことに気づくということもあります。

2つ目の「本人の特性からくる不適応」ですが、本人は何らかの苦痛があって学校に来られなくなっているのに、本人やお家の方と話をしながら探っていく中で、例えば「コミュニケーションが取りにくい」であるとか「すごく落ち着きがない、集中力がない」、あるいは、「注意力散漫で、集団の中で生活していくのはとてもしんどい」というようなことが見えてくる場合もあります。

それから、学校でのトラブルが原因で欠席する場合もあります。生徒同士の場合もありますし、教員とのトラブルもあります。そういったことが原因だということは保護者の方から欠席連絡を頂いた時とか、あるいは生徒自身からの訴えで分かる時もあります。生徒が不適応を起こした時には、何が原因で不適応を起こしているのかなという、その背景について情報を集めながら、丁寧に分析していくことが大事だと日々感じています。

では、不適応の生徒が出た場合、どのように対応するのかというと、ここに挙げてある4つのことが柱になるかなと考えています。

教員としては当たり前のことですが、「本人や保護者とつながる」ということです。不適応を起こしたからという訳ではなくて、普段から本人や保護者とつながっておくことは大事です。鳥大は附属小・中学校があるので、皆さんも生徒と関わられることがあるのかなと思ったりはしますが、生徒と色々な場面でつながることができません。もちろん授業の中でもつながれますし、授業と授業の間の休憩時間に他愛もない話をしてみたいとかもあります。本校は「教育相談の時間」というのを割と定期的に設けていて、担任と話ができる時間を作っています。そういう中で「なんか相談がない?」ではなくて、本当に他愛のない話をしていく中で、「あれ、今この子、ちょっとお家が大変なんかな」とか「いま部活がしんどいかな」とか色々なことが見えてきます。また、生徒自身も色々な話をしてくる中で「この人なら話しても良いかな」と思ってくれるような、そんな関係作りが出来てきます。保護者の方とは参観日であるとか、あるいは懇談であるとか、何か連絡を取らなければいけない時に、学校と保護者は、子どもと一緒に育てるといえるのか、関わっていく仲間なので、「あなたの子どもさんのこと大事に思っていますよ。一緒に頑張りましょう。見守りましょうね」というようなことを伝えていくようになっています。ただ、そうやってしても、やはり欠席が続いて不適応を起こすということがあるので、そうしたときには欠席の連絡の仕方がとても大事になってくるのかなと思います。私が担任をしていた時には、2日続けて休んだ時には家庭訪問をしました。それ以上ずっと休みが続いていく場合は、本人の様子であるとか、お家の様子であるとかを見ながら判断して、電話で連絡を取って、家庭訪問を止めておくとか、逆に毎日することもありました。手紙を書いて置くのであるとか、色々な方法を上手に組み合わせながら、つながりが途切れないようにしてきました。

次です。先ほどもちょっと言いましたが、情報を収集するということです。そのことからどのように支援していくかなという見立てが出てくると思います。大きくは3つかなと思いますが、まず「現状を把握する」ということです。本人から話を聞いて、どうして学校に来たくないのかということが分かれば一番良いのですが、多くの場合は本人も上手く説明できません。「言葉には出来んけど嫌なのに」というような感じになります。そういった場合は、学校の様子は、学級担任、教科担当、学年の教員、それから部活動の顧問とか、その子に関わりがある先生方から情報を聞いて集めていきます。また、お家の様子も「最近どうですかね」というふうには保護者の方に伺ったり、同居されているおじいちゃん、おばあちゃんに伺ったりします。おじいちゃんやおばあちゃんが色々なことを知っておられる場合もあります。このようにして、情報を取りまとめていきます。その場合に、私たちが大事にしていることは、憶測とか誰かの主観が入らない確かな情報ということことです。

それから、入学前の状況ですが、中学校は「申し送り事項」という形で、小学校の様子を引き継いでいます。ただ、本校のように600人も生徒がいると1学年200人になるので、200人の状況が事細かにこととはなかなか難しいです。そう

いう場合は、これから清水先生がお話しされますが、養護教諭という立場の方は本当に色々な情報を持っておられます。養護教諭同士も連携されているので、申し送り事項の他に養護教諭の先生が引き継いでおられる情報とか、本校は兼務で私が小学校に向かっているので、直接小学校の時を知る先生にお話を伺ったりして情報を集めます。兼務をしていて良いと思うことの一つに、小学校に弟や妹がいる場合には、その様子を聞くことで、その家庭の様子が分かってくるというようなことがあります。そういったことを基に入学前の情報も把握して、それらを合わせて、どうしていくのかということを考えていきます。

ここに示している図は、本校の校内連携を表しています。今日もあったのですが、「教育相談部会」を週に1回、1時間取って、ここに挙がっている人間が全員集います。情報交換をしたり、支援が必要な生徒について検討したりしていきます。また、この相談部会を待たずに必要に応じて必要なメンバーが集まって、私たちは「コア会議」と言っていますが、小さな会議をしながら支援をしていきます。そういうことをする時は、私のような立場の人間が情報を集約して、今後どんな動きにしていくのかということを確認して、全員で理解して動くようにします。本校の状況を考えてときに、先ほどもしましたが、養護教諭の存在はものすごく重要で、「ちょっと変だぞ、欠席が増えとるよね」というようなことも、私も見ているが、養護教諭からビュッと出てくることが多いです。不適応を起こして、教室にはちょっと入れないのだけど、でも、まだ学校に登校してくる力がある子というのは、たくさんいます。そういう子たちの一時的な受け皿として、本校では保健室がとても大切な役割を果たしています。保健室に来られる力があるうちに次の手をみんなで考えて対応しています。

皆さんの中には WISC という検査について勉強をされている方もおられるかなと思いますが、例えば WISC の検査をすることで、子どもの特性を考えながら次の手立てを考えていくというようなことがあります。その場合には、スクールカウンセラーの先生が、その検査をして下さるのですが、本校には通級指導教室があり、その担当者も WISC 検査ができますので、校内の支援が必要な場合は、早急に検査して頂いて検討をするというようなこともします。また、このスクールカウンセラーの先生、本校は大規模校なので2名の先生が来て下さっていますが、とてもたくさん情報を持っておられます。中学校区内の小学校でも関わって下さっていますので、スクールカウンセラーの先生との連携というのも欠かせません。色々な立場の人が持っている情報を集めながら、校内で支援をしています。

また、外部機関との連携ですが、一番大事なのは、学校というのは生徒の学びを保証する場であるということです。中学校は小学校から上がってきた子どもたちを次の社会に向けて育てていきます。ほとんどの子どもが高校に進学していきますが、中には就職する子もいます。そういう子どもたちが社会に出ていくときに、学びとっている力がなければ社会の中で生きていくことが出来ないの、外部につなげていくということも大事にしています。その場合は、生徒の実態に合わせてどこにつなげば良いかということを考えていくことが大切かと思えます。

先ほどふれました適応指導教室ですが、本校は校区内に鳥取市教育センターの適応指導教室があります。そこが月に3回イベントを開催して下さるので、完全に引きこもってしまっただけの子には、「そういうイベントに行ってみない?」と誘ってみたり、行ってみて「なんか、ここ良いかも」と思ってくれた子には「実はここでは勉強もできるし、色々な活動もできるのだよ」ということを話して、見学を勧めたりしています。

また、特性がある子どもたちにとっては、早い段階で医療につながっているということはとても大切です。医療につながって中学校に上がってくる子はいるのですが、継続して医療に関わっているという子はどうかというところがあるので、医療につながっているということも考えます。医療ということは「病院に行ってください」ということなので、いきなりそういうことを言うと、本人も、もちろん保護者もものすごく抵抗感があります。なので、本校の場合は鳥取県教育センターの教育相談を医療につなぐ第1段階として活用します。県教育センターが行っている教育相談では、ドクターと直接お話することが出来るので、そこで相談をかけて、今後、医療につなげていくかどうかということ相談して、必要であれば、つないでいくことをしています。

また、家庭環境等が背景にある不適応の子どもたちに関しては、福祉につながるようにします。例えば児童相談所であるとか、市の発達支援センターであるとか、あるいは、地域の民生委員さんであるとか色々なところにつないで対応しています。

3 つ目です。学校は不適応の生徒に色々な対応していますが、それでは、学校が抱える課題は何かということを考えてみたときに、それぞれの学校でそれぞれの課題があるかなと思います。今年、私が、この教育相談担当で不登校担当をして、学校が抱える課題だなど考えるのは、不適応を起こしている背景が複雑になってきているので、どう対応していけば良いのか、とても難しくなっているということです。例えば、不適応を起こしたきっかけは友達とのトラブルだったのだけでも、よくよく話を聞いていくと、「どうもこの子はコミュニケーションスキルがとても低いな。なので、こんなトラブルになったのだな。どうもそういう特性があるかな」ということが見えてきたとします。トラブルに関しては相互で話をしたりして、謝罪が出来たりして解決するかもしれないのですが、そういうコミュニケーションスキルが低い生徒であれば、また同じようなことを起こすという可能性があります。それがどんどんどんどん重なっていくと、不適応を起こしてしまうということになってしまいます。そうすると、根本的に解決しなければいけないことは、その子のコミュニケーションスキルを伸ばしてやることになります。それでは、どうしたらいいのかな、対応していくために何が必要かなということ、その子の特性を正確に測る、そういうことが出来る人、それが出来れば、それをスキルとして指導していくことが出来る人、スキルを入れれば全てが解決する訳ではないので、スキルを実際の生活の中で活かしていける力をつける人等、色々な人が関わっていかないと、その子に対応できないのかなと思います。そうすると、対応していく力を持った人が学校の中にたくさんいないと難しいのかなということになります。本校は通級指導教室があるので、WISC の検査ができ

たり、それが分析できたりする人間がいますが、県内の中学校に通級指導教室は4校しかありません。そうすると、他の中学校はどうするのか。スクールカウンセラーの方は、本校は大規模校なので、週に2回来ていただきますが、小さい学校は週1回です。そうすると、誰がWISC検査をするのか、全ての学校が、色々な条件が整っている訳ではないので、なかなか難しいと思います。でも、日々、子どもたちは色々な不適應を起こしたりして問題を抱えている状況なので、解決していかなければなりません。そうすると、私たち教員がそれらに対応していく力を身に着けていかないことには、学校が抱えている色々な課題を解決できないのかなと考えます。

最後4つ目です。「教員を目指す皆さんへ」ということなので、私が教員として大切にしたいなと思ってやってきたことを3つ挙げています。

1つ目は「人として誠実である」ということです。教員という仕事は、生徒と関わっているだけではなく、その後ろの保護者の方とも関わっていますし、地域の方とも関わっています。それから、本校だと60名教員がいるので、他の教員とも関わりながら仕事をしています。そうすると、毎日本当に色々なことが起こりますし、その場で対応しないといけない、後回しに出来ないことが山ほど起きてきます。そんな時に、教員経験を積んだからといって経験とか感覚とかで物事を見てしまうのではなく、「一体この子はなんでこんなことになっているのだろう」ということを受け止めるだけの度量がある人になりたいと思って、「誠実に向き合う」ということに取り組んできました。「生徒がどうしてそんなことになっているのかな」ということを考えながら向き合っていく。保護者の方からも色々なことを要求されたり、言われたりすることもあるのですが、一つ一つ聞きながら、お互いに歩み寄っていくというようなことをずうっとやってきて、学校に戻ってきた子どもたくさんいるのかなと思っています。

2つ目は、未だにこうやって対応している時に、「なんでこうなったのかな」とか、「どうしてこんなことが起きているのかな」ということを考えます。先ほども言ったように、経験を積んだり、年数が長くなったりしていくと、経験値でものを考えたりしがちになるので、「なんでだろう？、どうしてだろう？」ということ大事にしながら教員を続けています。

それから3つ目は、昨年鳥取大学で1年間学ぶというチャンスを頂いて、やっぱり「学び続ける」ということは、とても大切だなと感じています。教員をしていると、日々授業の準備もしないといけない、生徒指導もしなければいけない、報告文書を作らなければいけない等、色々なことがありますが、世の中、日々色々なことが変わってきているので、教員も学んでいく。大学で勉強して、卒業して教員免許も貰ったら、それで学びは終わりではなくて、学校現場に出て教員をしながら、色々なことを学び続けるという姿勢がなければ、教員という仕事は続けていけないのではないかと思います。ただ、日々の仕事をしながら、どうやって学び続けるのということもありますが、こういう場を頂いて、みなさんにお話しすることも、私にとっては一つの学びの場なのかなと考えています。なので、自分の生活や仕事量に合わせて、ずっと学び続ける教員であるということが大切であると思っています。

以上で終わります。ありがとうございました。

(石本) 村口先生、ありがとうございました。補足しておく、「通級指導教室」という言葉が何回か出てきましたが、これは、特別支援学級とか特別支援学校ではなくて、通常学級に在籍しているが、少し支援があったほうが上手くいくなどという子が通うところですね。すござっくり言うんですけど。

あと「WISC」っていう言葉もありましたけど、「WISC」は発達検査と言われるもので、本人の思考の面の得意不得意とかを検査するようなものです。これもすごく、ざっくりとした説明ですけども。

あと「小・中兼務教員」っていうのは、鳥取市独自のやり方なので、他の県とかに就職した場合は、そういうシステムは多分ないと思います。

それでは、引き続き清水先生の方からお話を聞きたいと思っています。

(3) パネリスト講演：  
清水ゆかり 鳥取市立湖山小学校養護教諭

(清水) こんにちは。湖山小学校から参りました、養護教諭の清水です。

さて、皆さん。もし、皆さんが担任を持ったとき、不登校の子どもに出会ったらどうしますか。その中で、「先生と合わない」「先生嫌いだ」と言って、不登校になったらどうしますか。大変ですよ。言われた先生は、ものすごくショックです。もう本当に「どうしたらいいだろう」と言って頭を抱えられる先生も中にはいらっしゃいます。これから、そういった事例も含めて少し話をしていきたいと思っています。

不登校の原因です。突然、不登校になることはありません。今まで話があったように、必ず予兆が現れてきます。保健室に多く来ます。「お腹が痛い、頭が痛い」という訴え、また、何も理由がないのに誰か友達と一緒に保健室に来たりだとか、怪我を多くしたりする子ども、あとですね、授業が始まっても保健室から出ていけない、なんか腰を上げにくい子どももいます。そのうち、遅刻、欠席、中学校になってくると欠課、ある授業だけ休む、というような予兆があり、「教室行きたくない、学校に行きたくない」というような形で表れてきます。

以前、中学校に勤めたときに、不登校・保健室登校した経験のある子どもの小学校時の欠席状況を調べたことがあります。なんと約8割の子どもが、小学校の時に10日以上休んでいる経験を持っていたということが分かりました。小学校で予兆があったかもしれない。もしかしたら、行き渋りというか、よく休む、そういった傾向のある子どもかもしれないということで、欠席というのは心のサインではないかと思っています。そこで、それからは、欠席が月に3日または年間10日以上ある場合は、どういう子どもなのかということリサーチしています。保健室入室状況はどうなのか、遅刻・欠席はどうなのか、中学校だと欠課、どういった授業で休んでいるのかというようなことをリサーチしながら、子どものサインを見逃さないようにしています。

今まで関わった外部機関、他の校種等ですが、小学校としては、まず中学校、そして、就学前の保育園・幼稚園があります。また、鳥取大学の学生ボランティアさんが湖山小学校に何名か来てくださっています。「分かる授業」ということで、

教員の方は一生懸命やっているところなので、そのへんの手助けをしていただいています。とても有難く思っています。これから教員になろうと思われる方がいらっしやいましたら、是非学校現場の方に来ていただいて、子どもと直接会って、その様子を見ていただくと、すごくよくわかると思います。その時は、是非、湖山小学校の方へ来ていただけたらと思います。また、問題行動とかになると、警察の方と関わりを持ってきます。東部少年サポートセンター、児童相談所。発達障害のある子どもに関しては、本校にもあります通級指導教室、また、鳥取養護学校の特別支援教育コーディネーターの先生、そして、LD等専門員による観察・相談等、こういった様々な先生方とも関わりを持っていきます。

保健室登校ですが、不登校から再登校を目指すステップとして、もう一つは、未然防止として保健室の場を活用していきます。不登校から学校へのステップというよりは、不登校になる前の未然防止の方が、保健室登校というのはい多いです。開始に当たっては、色々な先生と協議しながらやっていきます。私、養護教諭ですよ、担任はもちろん管理職、学年主任、生徒指導主任、特別支援コーディネーター等と支援の方法とか場所等について協議していきます。児童が学校に登校できる所、そして、安心して過ごせる場所が本当に保健室なのかどうか、また、支援する教員は本当にいるのかというようなことを協議して、学校体制を整えた上で、チームによる支援で保健室登校をしていきます。

保健室登校で、児童本人に支援することは、ここに6つ挙げております。子どもの実態に応じて、これが次の段階に飛んでいったり、前後変わっていきたりすることはあります。

「保健室登校・不登校と関わって、心がけていること」です。保健室は、いつでも誰でも利用できますね。「あなたは来ちゃいけない」ということはありません。なので、安心できる居場所づくりに心がけています。しかし、心地のよい場所にしてしまうと教室復帰の妨げになってしまうこともあるので、あまり心地の良い場所にはしないように頑張っているというようなどころです。

また、教室復帰に必要な条件として私が思うのは、担任・教科担当の先生との人間関係、そして学習支援です。保護者はここを一番心配しておられますので、その辺の支援が必要となってきます。あと、友だち関係です。教室復帰したときには、やはり近くで支えてくれるのが友だちです。この関係のない子どもは絶対に教室には上がりません。あと、不安材料ですね。教室復帰をするにあたり、子どもたちはすごく不安をいっぱい抱えています。その辺を少しずつでもいいので取り除いてやる。取り除くことは出来なくても不安を乗り越える経験していきことで教室に入りやすくなっていきます。スモールステップで教室復帰の練習をしていながら、成功体験を増やしていき「ああ、出来たね。やれるじゃない」というような形で支援していくということが大事かなと思います。そのために、我々教員は、チームで支援していくということが本当に大切であると考えています。担任の先生が1人で抱えるのではなく、私1人が対応するのではなく、教職員がそれぞれの立場を活かして色々な角度で子どもを見ていき、どんな支援ができるのかと一緒に考えていながら関わっていくことで、子どもたちは、あるべき場所に戻っていくんじゃないかと思っています。

最後に、子どもたちは、担任の先生に見てもらいたい、良く思われたいと、本当に思っています。けども、わざと先生を怒らせるようなことをする子どもの中にはいます。なので、担任がそれに乗って怒ってしまうのではなく、「あなたを見ているよ。あなたは大切な存在なんだよ」というサイン、表現をしていただけたらと思います。それも、勝負は新学期の4、5月じゃないかなと思います。4、5月は、本当に、出来たところを見つけて、子どもたちを褒めるということがとても大事じゃないかなと思いますので、そんな見方で子どもたちを見ていただけたらと思います。

以上で私の話は終わります。また何かあれば質問していただければと思います。以上です。

#### (4) 補足および会場からの質問とパネリストの回答

(石本) ありがとうございます。最後にね、すごく大事なことを言っておきました。「チームで支援」という言葉も出てきましたよね。最初に僕の方から説明したときに、「不登校というのは、皆さんが教員になったら、どこかで関わる可能性が必ずある」ということを言いましたけども、そういう時にね、先ほど清水先生からも、外部機関、どういふところと連携できるのかという話がありました。村口先生の方からも校内連携の例を示していただきました。最初は上手く対処できないかもしれませんが、1人で対処する訳じゃないので、そういうところで上手くやっていけるんだなということがわかり、少しは安心できるのではないかなと思います。関係を切らさないということとチームで色々な人と一緒になって支援していくということと、両方考えていくことが大事であるということがお話から分かったと思います。

じゃあ、まだ時間がありますので質疑応答で皆さんから何か質問があれば受けたいと思います。

(質問者) すごく貴重なお話をいただいて、感謝しています。ありがとうございます。

一つ、以前、新聞記事で読んだことがあるのですが、  
「登校することを良いことだと考えているから、その子どもが苦しんでいるのではないか」と書いてありました。その「無理に登校させようとして、それによって子どもが自殺してしまうのであれば、むしろ不登校は健全な行為だと捉えるべきだ」というふうに書いてあったのですが、それについて意見を頂戴したいのですが、お願いします。

(八木) 小学校から学校を経験していて、学校にすごいマイナスの思いがあって、登校ができなくなったりとか、色々なケースがあると思うのですが、不登校の対応は一人一人で行っているし、不登校のステージでも違うと思います。もう本当に不登校が進んで、家から一歩も出られないとか、不登校の期間とか、不登校の深さは人それぞれだと思っています。教員はその子その子に合った支援をしていかないとはいけません。なので、学校に行くことは良いことだとか悪いことだということを一一般論として論じるのではなく、その子にとって学校に行くことはどうなのか、「行かなくてもいいんだよ」という支援が良い子もいれば、「学校に行こうよ」という支援が良い子もいます。漠然とした答えですけど、そ

の子の状況やその子の背景,あるいは、その子の解消状況を見て、言ってあげるアドバイスかなと思いました。

(質問者) ありがとうございます。

(質問者2) 地域文化学科4年の水野と申します。来年度、4月から教員として働きます。

私は2年半の間、不登校傾向の生徒に家庭教師として関わった経験があります。その子は、昼間は自分の部屋でテレビとかゲームをしていて、夜はやんちゃな子たちと一緒に外で遊ぶというような子でした。その子に率直に「どうして学校に行かないの」と聞いたら、「学校には居場所がない。誰も自分のことを認めてくれない。だから学校に行きたくないんだ」と答えました。クラスメイトも、その子が学校にいないことに対して当事者意識を持っていないし、そういうことに関して問題には思っていないように思いました。クラスメイトが、その生徒をあたたく迎えるためには、教師として不登校でない生徒にどうアプローチをしていけば良いのか、どのように指導していけば良いのかということをお教えいただければ嬉しいのですが。どうでしょうか。

(村口) 答えになっているか分からないのですが、私がかつて担任した生徒に、不適応を起こして学校に来れない子がいました。その子は、今おっしゃるように、非行で学校に来れないようになりました。彼は生活を立て直すために自立支援の施設に行きました。自分のクラスの子だったので、そうならないようにずっと関わってきたのだけれども、最終的にそういう結果になってしまいました。その時が中2だったので、そこから、その自立支援施設に、2~3か月に1回くらいは通い、中3になって担任は外れましたが、引き続き、その子のところに通いました。私がそうやって関わっているということを周りの子どもたちは感じ取ってくれていて、「先生、あいつどうしてる」と聞いてきたりして、「元気だ」と言って、その様子を話して聞かせたりしました。その子は学校に存在はないんだけど、子どもたちの間では確かに存在していました。その子は、本当は学校に帰って来れたんだけど、皆にどういう顔して会えばよいのか分からないので、「先生こっちで卒業する」と言って、卒業式には帰ってきませんでした。ただ、その時に、電報を送りました。その電報を抱えて、とてもうれしそうに卒業式に出ていたよと聞きました。その子は、卒業した後も、2回来てくれました。高校に行くときも、「どうしたらいい」と相談してくれました。

教員が諦めずに関わっていれば、周りの子には伝わるんだなと思います。周りの子が何かをするのではなくて、教員が何かをしないと子どもたちには伝わらないのかな。頑張っていれば必ず伝わるのかなと思います。

(質問者2) ありがとうございます。

(質問者3) 地域学部地域政策学科1年の大島といいます。本日は貴重なお話しありがとうございました。

話を聞いている中で「分かる授業づくり」というところに、深く感じるものがありました。僕はその中で習熟度別の少人数教育というのに興味があります。その習熟度別になったら、

レベルに合った授業の展開もできる少人数で質問もしやすいというメリットがあると思うんですけど、習熟度によって、また格差が生まれて、学校に行きたくないという子どもが出てくるのではないかと思います。その点に関して、先生方は、少人数の習熟度別教育というのをどのようにお考えなのか、意見を伺いたいですけども、お願いします。

(清水) 私は、本校では習熟度というよりは少人数というような形での授業をしていると把握しています。単元が変わるごとにクラス替えをしていくような形で、あまり、出来る子、出来ない子というような形でのクラス分けはしてきてないかなと思います。ただ、本当に学習の支援が必要で、個別に取り出して指導が必要な子どもは、保護者と相談しながら、また本人の了解を得ながら、そういう学習面での支援をしているという場合もあります。

なので、その辺、教員も本当に配慮しなければいけないところですけども、今後、教員になられるときに、またその辺も、クラスの実態、学年の実態を見ながら、また悩みながらしていただけたらいいんじゃないかなと思います。

(石本) ちょっとだけ補足すると、その習熟度で分けるということよりは、分けたことによって、いやな思いをしたりすることのないように指導していくということを考えていかなければいけないと思います。

(質問者3) ありがとうございます。

(石本) 時間になりましたので、ここで終わらせていただきたいです。

改めて3人の先生方に拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。